

京都市内遺跡試掘調査概報

平成9年度

京都市文化市民局

ごあいさつ

京都は、世界に誇る数多くの歴史遺産に恵まれた大都市であります。市内には多くの遺跡があり、これらは埋蔵文化財包蔵地と呼ばれ、年代ごとに幾層にもわたり積み重ねられた歴史の重みをもつものが数多く存在します。

このような埋蔵文化財は、我が国の歴史や文化の成り立ちを知ることができる国民共有の貴重な財産であり、将来にわたって保存すべきものであります。

近年、埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等による開発行為は、これら埋蔵文化財保護に少なからず影響を及ぼしております。先人が残した埋蔵文化財を引き継いだ私達は、その保存と開発行為との調整を適切に行い、これを後世に伝承していく責務があると考えております。

本報告書は、平成9年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査の結果をまとめた概要報告書であります。この調査のうち、試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが実施し、発掘調査及び立会調査は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託したものであります。

結びに、この度の各調査の実施に当たりまして、御理解と御協力を賜りました市民の皆様を初め、御指導と御助言を賜りました関係機関の皆様から心から感謝申し上げますとともに、本報告書が京都の歴史を知るための一助として、お役立ていただければ幸いに存じます。

平成10年3月

京都市長 榎本頼兼

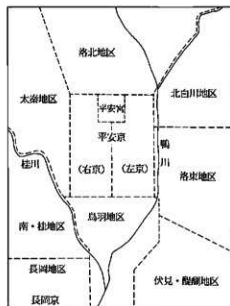
例 言

- 1 本書は、京都市が文化庁国庫補助を得て実施した平成9年度の京都市内遺跡試掘調査概要報告書である。

なお、本書は平成9年1月から12月まで実施した試掘調査の結果の概要を報告している。

- 2 試掘調査を実施した総ての地区・所在地・調査日・調査概要については、試掘調査一覧表に掲載（36～39頁）している。
- 3 本文の執筆分担は、本文の末尾に記している。
- 4 本書に使用した地図は、本市の都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺1/2,500）を複製して調整したものを掲載している。なお図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。
図版1～13 1/8,000 図版14～19 1/10,000
- 5 本書に使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準じた。
- 6 遺物整理にあたっては、丸山裕見子・三竹史明・新 康弘・鶴岡隆司の協力を得た。
- 7 本書作成、調査実施にあたっては、京都市埋蔵文化財調査センターが担当し、次の機関の協力を得た。

京都市文化市民局文化部文化財保護課・（財）京都市埋蔵文化財研究所



調査地区割図

目 次

	頁		頁
I 試掘調査の概要	1	V 西寺跡	21
1 調査の概要	1	1 はじめに	21
2 各地区の調査概要	1	2 No52地点調査地	21
3 ま と め	4	3 No53地点調査地	24
II 平安宮跡・聚楽第跡	5	VI 平安京右京九条二坊八町跡	25
1 はじめに	5	1 はじめに	25
2 No60地点調査地	5	2 調査概要	26
3 No27地点調査地	9	3 遺 物	28
4 聚楽第跡の範囲について	11	4 ま と め	29
III 平安京左京六条三坊九町跡	14	VII 小野瓦窯跡	30
1 調査経過	14	1 調査経過	30
2 遺 構	14	2 遺 構	30
3 遺 物	15	3 遺 物	31
4 ま と め	16	4 ま と め	32
IV 平安京右京六条四坊二町跡	18	VIII 長岡京跡	34
1 調査経過	18	1 調査経過	34
2 遺構・遺物	18	2 遺 構	34
3 ま と め	20	3 ま と め	35
		報告書抄録	40

図 版 目 次

- 図版1 平安宮
- 図版2 平安京左京北辺・一・二・三条 一・二坊
- 図版3 平安京左京北辺・一・二・三条 三・四坊
- 図版4 平安京左京 四・五・六条 一・二坊
- 図版5 平安京左京 四・五・六条 三・四坊
- 図版6 平安京左京 七・八・九条 一・二坊
- 図版7 平安京左京 七・八・九条 三・四坊
- 図版8 平安京右京北辺・一・二・三条 三・四坊
- 図版9 平安京右京北辺 一・二・三条 一・二坊
- 図版10 平安京右京 四・五・六条 三・四坊
- 図版11 平安京右京 四・五・六条 一・二坊
- 図版12 平安京右京 七・八・九条 三・四坊
- 図版13 平安京右京 七・八・九条 一・二坊
- 図版14 植物園北遺跡・中臣遺跡・山科本願寺跡
- 図版15 雲林院跡・引接寺境内・法興院跡・岩倉忠在地遺跡・小野瓦窯跡・法性寺跡・
北白川麿寺跡
- 図版16 白河街区跡・郡城跡・檉原庵寺跡・嘉祥寺跡・上里北ノ町遺跡
- 図版17 伏見城跡
- 図版18 鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡
- 図版19 長岡京跡

挿 図 目 次

	頁		頁
図1 調査位置図及び聚楽第推定範囲	6	図20 トレンチ位置図	22
図2 トレンチ位置図	7	図21 2トレンチ南壁土層図	22
図3 石垣部分西壁土層図	7	図22 軒平瓦拓影及び実測図	23
図4 石垣検出部分平・立面図	9	図23 トレンチ位置図	24
図5 トレンチ位置図・堀跡推定断面図	10	図24 遺構略図	24
図6 トレンチ東壁断面図	10	図25 平安京条坊図(調査位置)	25
図7 出土瓦拓影及び実測図	11	図26 平安京条坊復元と調査 位置図	25
図8 平安京条坊図(調査位置)	14	図27 トレンチ位置図と1トレンチ 土層断面略測図	26
図9 調査位置図	14	図28 検出遺構の平・断面実測図	27
図10 トレンチ位置図	15	図29 出土遺物実測図	28
図11 埋壘部分東壁見通し断面図	15	図30 調査位置図	30
図12 埋壘内出土土器実測図	17	図31 トレンチ位置図	30
図13 平安京条坊図(調査位置)	18	図32 溝1部分西壁土層図	31
図14 調査位置図	18	図33 出土瓦拓影及び実測図	32
図15 トレンチ位置図	19	図34 調査位置図	34
図16 1トレンチ北端西壁土層図	19	図35 トレンチ位置図	35
図17 出土土器実測図	20	図36 5トレンチ北壁土層図	35
図18 平安京条坊図(調査位置)	21		
図19 調査位置図	21		

表 目 次

	頁
表1 地区・年度別試掘調査実施件数一覧表	1
表2 埋壘内出土土師器皿類破片点数	16
表3 試掘調査一覧表	36~39

写 真 目 次

	頁
写真1 現存石垣（東から）	8
写真2 検出石垣残存状況（東北東から）	8
写真3 埋塞検出状況（東から）	16
写真4 埋塞完掘状況（南から）	16
写真5 流路跡（北東から）	20
写真6 2トレンチ側溝部分（北東から）	23
写真7 石組み井戸（西から）	23
写真8 調査地全景（西から）	23
写真9 調査地全景（南西から）	24
写真10 1トレンチ全景（西から）	26
写真11 2トレンチ全景（西から）	27
写真12 井戸跡1（手前）と井戸跡2（東から）	29
写真13 溝1完掘状況（西北から）	31
写真14 1トレンチ全景（西から）	35
写真15 5トレンチ全景（東から）	35

I 試掘調査の概要

1. 調査の概要

京都市における周知の埋蔵文化財包蔵地内で行われる土木工事の申請件数は、1年間で千三百件（平成9年）を越すが、そのうち小規模ながら重要遺構が存在する可能性のある場所や、比較的大規模な土木工事の申請があった場合は、遺構残存状況や範囲確認及び発掘調査実施の有無を判断するために、土木工事の開始前に事業者の協力を得て、京都市埋蔵文化財調査センター（以下「センター」と呼ぶ）が試掘調査を実施し、遺跡の保護に適合した調査を指導している。

この概要報告書は、センターが平成9年1月8日から12月18日まで、ほぼ1年間にわたって実施した試掘調査の結果をまとめたものである。

2. 各地区の調査概要（36～39頁の試掘調査一覧表・図版1～19参照）

(1) 平安宮地区 平安宮跡内では、朝堂院・豊楽院・内裏・采女町・梨本・大藏庁・大膳職・典薬寮に推定される場所10件について試掘調査を実施した。

宮跡では、大半が後世の擾乱や近世に整地された場所で、遺構・遺物の検出には至らなかった。

平安宮跡に含まれる聚楽第跡の試掘調査では、先に火事による罹災を受けて再建が計画された、

表1 地区・年度別試掘調査実施件数一覧表

分類	区域名	1～3月末	4～12月末	計	発掘指導	設計変更
埋蔵文化財	平安宮地区	4	6	10	0	0
	平安京左京地区	3	13	16	3	0
	平安京右京地区	6	11	17	1	0
	洛北地区	2	5	7	1	1
	北白川地区	1	2	3	0	0
	洛東地区	2	6	8	2	0
	伏見・醍醐地区	0	6	6	0	0
	鳥羽地区	3	8	11	0	1
	南・桂地区	1	2	3	1	0
	長岡京地区	2	7	9	0	0
		(小計)	24	66	90	8
史跡指定地		0	1	1	0	0
	合計	24	67	91	8	2

上京区智恵光院通水下水下分銅町にある松林寺は、以前より境内は聚楽第の南堀跡と推定されていたが、今回の試掘調査により、旧地形は堀状と判明したものの、中世期の城郭の堀としては堀底が極めて浅いことが判明し、また新たな疑問となる試掘調査結果となった。(本文掲載)

(2) 平安京左京地区 この地区では16件の試掘調査を実施し、その内3件を発掘調査指導した。

二条二坊九町(中京区東堀川通丸太町上る東側)では、高陽院の池池跡の一部とみられる遺構を検出したため発掘調査を指導した。また、四条一坊四町(中京区壬生御所ノ内町)からは、推定朱雀大路の東側溝付近から南北溝跡が検出され、土器など平安時代の遺物が多数出土したため発掘調査を指導した。六条三坊九町(下京区室町通松原下る阿替町)では、地表下1.5mで室町時代の土壌や柱穴を検出している(本文掲載)。史跡教王護国寺(東寺)境内では、現状変更に伴う堂宇の建て替えに伴って北面築地部分を調査し、溝・築地跡を検出した。

そのほか、数箇所で大規模な平安時代の遺構・遺物を検出した場所や、中世期から安土桃山時代の土壌や柱穴などを検出した場所もあったが、全体的に後世の攪乱が多く、遺構の残りも悪い場所があったほか、かつての大規模な土探りで遺構面が完全に消滅している所もあった。

(3) 平安京右京地区 右京地区では17件の試掘調査を実施し、うち1件を発掘調査指導した。

朱雀院に当たる四条一坊一町(中京区壬生天池町)では、2回目の試掘調査をセンターが担当、敷地の北半から建物跡を検出したことから発掘調査を指導した。

西寺跡(南区唐橋西寺町)では、未指定部分の境内西限推定地及び西寺西僧房基壇跡の2箇所を試掘調査を実施、西限では築地基底部を確認し、かたや僧房跡の基壇土を検出した。(本文掲載) そのほか、六条四坊二町(右京区西院清水町)では、地表下1.1m以下で古墳時代の流路跡を検出し、遺物が出土している。(本文掲載)

右京域は、全体的に後世の河川の氾濫や流路などによって平安時代の遺構が消滅している場所も多く、試掘調査段階で埋蔵文化財調査を完了しているところが多い。

(4) 洛北地区 植物園北遺跡2・引接寺跡1・岩倉忠在地遺跡1・小野瓦窯跡1・雲林院跡1・聚楽第跡1の合計7件の試掘調査を実施し、内1件を発掘調査、1件を設計変更の指導を行った。平成8年の遺跡地図改訂で初めて周知の遺跡となった引接寺跡と雲林院跡からは、遺構・遺物は何も検出されなかった。

植物園北遺跡(北区上賀茂向繩手町)では掘立柱建物1棟を検出、また、北区上賀茂岩ヶ垣内町では奈良から平安時代の掘立柱建物跡や柱穴・土壌を検出し、発掘調査を指導した。

宅地開発が予定された小野瓦窯跡(左京区上高野小野町)は、『延喜式』所載の「小野瓦屋」推定地であるが、試掘調査では、溝跡と粘土探掘跡とみられる土壌を検出、灰原に投棄されていたとみられる軒先を含む遺瓦が多数出土し、生産地出土の貴重な資料となった。(本文掲載)

また、聚楽第跡(上京区一条通松屋町西入鏡石町)では、北堀跡とみられる東西の石垣(聚楽

第跡では初めての遺構の一部を検出、設計変更で遺構の保存を図った。(本文掲載)

(5) 北白川地区 北白川廃寺1・白河南殿跡1・法興院1の3件の試掘調査を実施した。

北白川廃寺(左京区北白川上別当町)では、地表下1m前後で古墳から飛鳥時代の柱穴や平安時代の土壌を検出、白河南殿跡・法興院跡では有力な遺構・遺物は検出できなかった。

(6) 洛東地区 中臣遺跡6・山科本願寺跡1、法性寺跡1の8件の試掘調査を実施し、2件について発掘調査を指導した。

中臣遺跡では4件の試掘調査場所からは遺構・遺物は何も検出できなかったが、山科区東野森野町では、地表下1m付近から弥生から古墳時代にかけての遺物が出土し、平安時代の土壌状遺構を検出した。また、山科区勤修寺西栗栖野町の宅地建設に伴う試掘調査では、先の隣接地で確認されていた方形周溝基の遺構の続きが検出されたため、国庫補助による発掘調査を指導した。

(7) 伏見・醍醐地区 伏見城跡5件・嘉祥寺跡1件の6件の試掘調査を行った。

伏見城跡では、井戸・柱穴・土壌・溝跡・石垣石などを検出した場所もあるが、いずれも遺構の残存状況が不良な場所も多く、調査は試掘段階で終了している。

嘉祥寺跡についても、近世の瓦や獣骨が出土したのみで、遺構・遺物は検出されなかった。

(8) 鳥羽地区 鳥羽離宮跡が10件、下鳥羽遺跡1の11件、内1件を設計変更の指導を行った。

鳥羽離宮跡では湿地や河川の流路跡なども多く、遺構・遺物は検出されなかった。また下鳥羽遺跡(伏見区下鳥羽芹川町)では、弥生時代から古墳時代にかけての竅穴住居状遺構や溝状遺構を検出したが、設計変更をしてもらい遺構の保存を図った。

(9) 南・桂地区 この地区では、郡城跡1件・櫻原廃寺跡1件・上里北ノ町遺跡1件の3件の試掘調査を実施し、櫻原廃寺については発掘調査を指導した。

郡城跡、上里北ノ町遺跡からは重要遺構・遺物は何も検出されなかった。

櫻原廃寺は、寺域の北端域で試掘調査を実施した結果、大型の掘立柱建物跡や柱穴、瓦などの遺物を包含する溝(回廊雨落ち溝)などが検出されたことから発掘調査を指導した。

(10) 長岡京地区 長岡京跡8件・羽東師志水町遺跡1件の計9件の試掘調査を行った。

長岡京跡は遺構面が薄く、遺物散布も脆弱な場所が多い。重機提供による1日程度の試掘調査では、目に見えるような状態で遺構を検出するのは極めて困難な場合が多く、成果を上げられないのが実情である。今回は伏見区羽東師志水町(長岡京)の宅地開発予定地の地表下1.7m付近から、推定東三坊大路の東・西側溝とみられる遺構を検出することができた。(本文掲載)

3. まとめ

試掘調査の結果、重要遺構が検出された場所では、工事で遺構が著しく破壊される場合は発掘調査を実施するように指導しているが、平成9年も、当初から発掘調査指導のもの、試掘調査を経て発掘調査を指導したものを含め、いくつかの場所から重要な遺構・遺物が発見されている。一例を紹介すると、北区の上ノ庄田瓦窯跡では、区画整理に伴って平安時代前期に瓦を焼いた2基のロストル式（分焔床）平窯跡を確認し、発掘調査が行われた。平安京北限及び北野廃寺（北野下白梅町）では、平安京北辺を限る位置に幅12mの外堀状の東西大溝が検出されている。

上京区にある平安京左京二条二坊九町（高陽院跡）では、10世紀の苑池の汀跡や11世紀の建物跡・廊跡・洲浜のほか、ポットホールを持つ海岸から運び込まれたとみられる礎石が出土した。

左京区の京都大学西部構内遺跡では、平安後期の防御施設のある武家屋敷跡（居館）とみられる遺構が見つかり、近くの院政期の遺跡（六勝寺にかかる院御所）との関係が注目される。

中京区のJR二条駅周辺整備区域内に位置する平安京右京三条一坊三町跡からは、建物跡のほか右京職に関係するとみられる「右籙所・計帳所」などと墨書された土器が出土している。また、三条通千本西入の朱雀院跡では、平安時代の掘立柱建物跡6棟のほか遺物も多数出土した。

山科区にある山科本願寺跡からは、土壘や濠のほか、甕蔵、工房跡などの遺構も検出された。また、中臣遺跡からは、国庫補助に伴う調査により方形周溝基2基が見つかった。

下京区では平成9年に新しくオープンした京都駅の北西部に当たる平安京左京八条十二坊跡から中世墓跡群が発見され、人骨を伴う木棺がいくつか見つかった。さらに、その北隣の敷地からは、中世期の鑄造所跡に関係する遺構がいくつか見つかった。平安京右京六条一坊跡（中堂寺栗田町）では9世紀の邸宅跡が検出され、この付近（大阪ガス工場跡及び土地区画整理地区）における寝殿造り建物の解明が徐々にではあるが進展しつつある。

右京区の梅ヶ畑銅鑄出土地に近い北尾根部分からは、雨乞いに関係したとみられる祭祀遺跡が見つかり、奈良時代から平安時代にかけての二彩陶器を含む大量の土器類が出土した。祭祀遺構は不明確ながら、平安時代に陰陽寮が行う国家祭祀的な祈雨（雨乞い）の場を解明する上で大変重要なものであり、発見遺跡は「梅ヶ畑祭祀遺跡」と名付けられた。また、文化ホール建設予定地（右京区安井西裏）からは、近く（天神川の西対岸）にある森ヶ東瓦窯跡に関連するとみられる平安時代中期の瓦窯跡2基を新たに発見（安井西裏瓦窯跡と呼称）、発掘調査された。さらに、この瓦窯跡北方にある法金剛院旧境内からは、中門廊、遺水、池の護岸などが検出され、JR花園駅周辺整備事業に伴って法金剛院旧境内の解明が着実に進んできている。

西京区の標原廃寺では、推定伽藍北域において数棟の掘立柱建物跡や北回廊跡が検出され、また、八角塔跡北側の推定金堂跡地での国庫補助による発掘調査では、金堂基壇跡の一部（北辺・東辺）が検出され、白鳳時代創建寺院の解明に新たな資料が加えられた。

（梶川敏夫）

II 平安宮跡・聚楽第跡 No.27, No.60

1 はじめに

豊臣秀吉によって天正14年(1586)に築造され、同15年(1587)に完成をみた聚楽第は、秀吉の甥であり後継者とみなされていた関白秀次に同19年に譲られた。しかし、文禄4年(1595)の秀次の失脚とともに、秀吉の命によりこの聚楽第は破却され、その栄華は10年に満たずに終焉を迎えてしまう。この聚楽第については、築城当時の資料が極めて少ないため、足利健亮氏の復原案¹⁾等多くの推定がなされてきた。

聚楽第は、平安宮跡と遺跡範囲の重なる部分が大きいため、調査件数は比較的多い。しかし、直接聚楽第に結びつくような成果はごく限られたものであった。ところが、本年の調査で聚楽第の北堀・南堀推定地で共に試掘調査を行い、特に北堀推定地では当遺跡で初めて石垣を確認することができたので、ここに報告する。

2 No.60地点調査地

調査地は、京都市上京区一条通松屋町西入鏡石町23他で、一条通と大宮通の交差点から西へ約80mのところにある。土地の面積は1,283㎡で、南北に長い形状をしている。現状の敷地北側の隣地境界は、石垣になっている。特に写真1で示した箇所は石垣は積み方が古い様相を呈しており、聚楽第に関連する可能性が高い。当該地と石垣を隔てた北側隣接地との比高差は約2.5mあり、北側隣接地の方が高く、従来から聚楽第の北限ではないかと考えられていた。

ここに、京都市の指導・補助のもと、智恵光院一条地区京路地再生事業の一環として共同住宅の建設が計画されたため、試掘調査を行うことになった。

調査の結果、北堀に伴うと考えられる石垣を発見することができ、調査後の石垣石は施主のご協力を得て設計変更の上、現地保存を図ることができた。

2-1 遺構・遺物

調査は敷地中央部に南北方向のトレンチを設定して行った。北側隣接地の石垣基底部から南へ約13m、標高51.5mで石垣の一部を検出した。この続きを確認するために、東側にトレンチを拡張した結果、東西方向に並ぶ4個の石と抜き取り穴から成る石列を検出することができた。

層序 断面観察から、石垣残存部分の堆積状況(図3)は大きく七つに分類することが可能である。検出石垣は地山の聚楽土と聚楽土下層の黄褐色砂礫層を掘り込んだ場所に、栗石を後方から敷き詰めて据えられている。その後方の18層、19層も石は残っていないものの、栗石と地山の掘り込み状況から石垣の一部と考えられるため、これらを聚楽第破却後もわずかに残った創建時の残存層と考え、第一のまとまりとした。

二つ目のまとまりは15層、16層である。これらは破却時の石の抜き取り穴と考えられる。

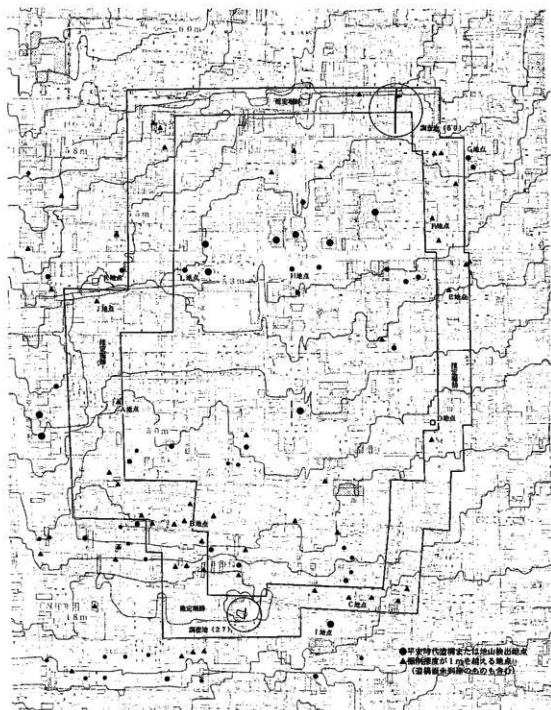


図1 調査位置図及び要素第推定範囲 (1:5,000)

三つ目のまともりは、破却後、構築目的は不明だが、14層から7層へと順に砂泥層を積み上げ構築した窠状遺構に伴う堆積である。

四つ目は再構築した窠状遺構の埋没過程を示す5層から4層への堆積である。特に、4層は炭層と黄褐色砂泥が交互に堆積しており、遺物も近世の土師器皿やキセル等を多く含んでいる。

3層及び2層は宅地化の進展に伴う整地層と考えられ、五つ目のまともりと考えた。

六つ目として、焼土層を上げることができる。この焼土層は、土地所有者の話から幕末の火災を示すものと考えられ、設定したトレンチの全域で認められる。

最後の層は火災後の整地土である表土になる。

石垣 検出した石列(図4・写真2)は水平ではなく、西端の石から東へ順に低くなっている。石の天場は西端で標高51.8m、東端で標高51.6mと差が大きい。

石の面はほぼ真北を向いて揃っている。石の大きさは、1石目は高さ約60cm、検出した幅は約半分と考えられるが38cmである。2石目は高さ58cm、幅96cm、3石目は高さ42cm、幅83cm、そして4石目は高さ30cm、幅50cmとなる。石材は全てチャートである。断面観察から2石目の前面下部に石を安定させるためのかい詰め石を置いていること、石の後方及び石間には拳大の栗石を敷き詰めており、この石列は聚楽第北堀の南岸を護岸していた石垣の基底部と考えられる。

抜き取り跡は東西長1.7m、南北長60cm、トレンチ東端には別の抜き取り穴を確認したが、規模は不明である。

2-2 まとめ

まず、検出された石列は聚楽第の北堀の南側石垣と考えられるが、幅が13mに満たないことや、検出石列後方の抜き取り痕跡から、石垣は複数の段差を設けて築かれていた可能性が高い。

次に、この石垣は基底部しか残存していないので、聚楽第の破却が徹底的に行われていたことを示している。

三つ目として注目すべきは、破却後にこの石垣基底部の立ち上がりを利用して堀状遺構が構築されていることである。

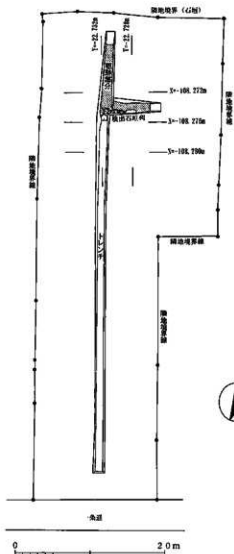


図2 トレンチ位置図 (1:500)

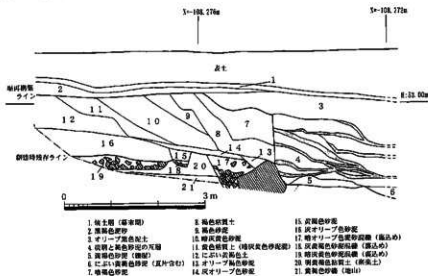


図3 石垣部分西壁土層図 (1:80)



写真1 現存石垣（東から）



写真2 検出石垣残存状況（東北東から）

同じ聚楽第の堀跡である天秤堀がゴミ穴として利用されていることから、当遺構も都市生活に必要な廃棄施設として再利用されていたのかもしれない。

3 No.27地点調査地

調査地は、京都市上京区智恵光院通下水下の分銅町575番地の松林寺境内である。当該地は前面道路である新出水通から約1.2m、南側隣接地から約3.3m低い窪地のため、従来から聚楽第の南堀ではないかと考えられてきた場所である。ここに松林寺本殿の再建が計画されたので試掘調査を行うことになった。

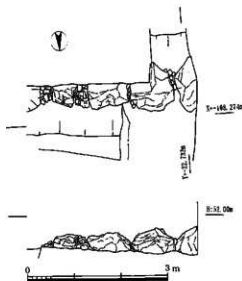


図4 石垣検出部分平・立面図 (1:80)

調査の結果、平安宮に関連する軒平瓦・軒丸瓦等の瓦片が多数出土したが、近世の陶磁器類と共伴しており、聚楽第の堀跡で廃絶後の整地時に混入したものと考えられる。

3-1 遺構 (図5・図6)

敷地内の本堂計画場所の南側は1段低くなって墓地に使用されており、聚楽第の堀跡の構造を探る上でも縦断トレンチを設定すべきであるが、建設範囲を大きく越えるため、今回は本堂予定地内に長さ14m、幅1.4mの南北トレンチを1本設定して調査を行った。

層序 敷地北半の地表下40cmに漆喰で固められた床面がある。この下層に礫混じりの明黄褐色砂泥の盛土が見られるが、北側は灰黄色泥砂層、南側は黒褐色泥砂層に切られている。明黄褐色砂泥層の下層には褐色泥砂層が30~50cmで堆積している。この泥砂層を切って土壌状の落ち込みが南北両端に認められる。この褐色泥砂層の下層は一部聚楽土が残存するが、聚楽土下層の黄褐色砂礫層が露出しており、砂礫層を掘り込んだ遺構も確認できた。

堀跡 トレンチで掘削した全体が堀跡の中と考えられるが、埋土は湿地状の堆積を示しており、地山の検出レベルも新出水通との比高差が3.5m程度であり、敷地の幅から考えて非常に浅い。

3-2 遺物 (図7)

大部分が平瓦であり、掲載可能な軒丸瓦は2点、軒平瓦は4点であった。また、特徴的な叩き圧痕をもつ平瓦1点を掲載した。平安時代前期と後期の瓦が混在している。

軒丸瓦 1の単弁八葉蓮華文軒丸瓦は、中房平坦で1+5の蓮子をもつ。蓮弁は梯形に近く弁端中央はやや窪んでいる。子葉は長方形で、先端部は山状に三つの膨らみをもつが、一葉は蓮弁と子葉が一体になっている。先細りの単線で表現された弁間文をもち、幅広の周縁に沿って圏線が巡っている。胎土は砂粒を含み、焼成堅緻で青灰色を呈している。これと同文のものが内裏蘭林坊跡から出土しており、平安時代後期と考えられる。

2も単弁八葉蓮華文軒丸瓦と考えられ、内裏跡出土のものを同文にもつ。圏線とは別に、花卉の先端部に沿って細線を巡らしている。瓦当から筒に向かってヘラで削っており、焼成は軟質で

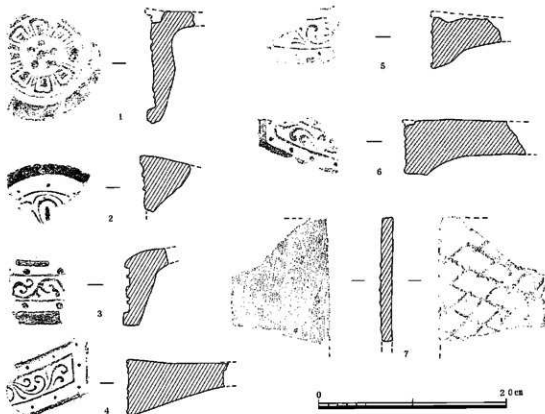


図7 出土瓦拓影及び実測図(1:4)

(財)京都市埋蔵文化財調査研究センターが検出した聚楽第東堀の推定深度8.4m²⁾に比べて極めて浅い。これは先述したとおり、堀の幅に対して不釣り合いな深さであり、現状地形でさらに1段落ち込む南の墓地付近で聚楽第の堀も急激に落ち込むものと考えたい(図5)。

4 聚楽第跡の範囲について

今回の調査で聚楽第の北堀・南堀の状況が明らかになった。そこで、京都国立博物館の作成した平安宮現状地形図³⁾の等高線分布図、及び(財)京都市埋蔵文化財研究所の報告書である『平安宮I』⁴⁾にまとめられた発掘・試掘・立会調査のデータと、京都市埋蔵文化財調査センターが平成3年以後に行った聚楽第関連の試掘調査の結果を総合して、ここに聚楽第の復原を行うものである。

従前の調査で平安時代の遺構の残存する箇所については、調査地(60)や(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの発掘した東堀(図1のE地点)のデータから考えて、聚楽第の堀跡とは考えにくい。また、地表下1m未満で地山の検出された地点についても同様のことがいえる。これらの地点を図1の●点で表現した。一方、掘削深度が1mを越えても中世以前に遡る遺構の検出されない箇所や、湿地状の堆積を示している箇所については、聚楽第の堀内である可能性があるため、図1の▲点で表現した⁵⁾。

北堀 調査地(60)の石列と北側敷地境界の石垣との距離は約13mである。これではあまり

にも幅が狭いため、二段以上の立ち上りで石垣が形成されたと考えて幅を約30mとした。北の境界とした現存石垣は、積み方は違うものの100m余り続いている。智恵光院通から西に關しても、標高の著しく変化するラインが調査地（60）付近の境界と一致するため、約400mの直線的な堀として北堀を考えた。

東堀 北側隣地境界の等高線が南に急激に変化する、調査地（60）の東約60mの地点を北堀からの屈曲点として設定した。東堀を直線で捉えず屈曲をもたせたのは、この屈曲点や平成7年の試掘調査地で、4箇所のトレンチとも土層の極めて悪かったF地点が、東下がりの聚楽第堀跡の確認されているE地点よりも西側にずれてしまうからである。図中のD地点は聚楽第の絵図にも描かれている梅雨の井で堀跡からは除外した。東堀南半に関しては、天秤堀を埋め立てた天秤町を取り込むようにした。また、G地点は昭和49年に地表下1.6mで花崗岩の切石が9個検出され聚楽第の建築遺構と推定されている場所である。しかし、南側で平安時代の包含層が、さらに西側の近接する2箇所で湿地上の堆積を示すことから、堀幅は大宮通の東端までであり、このG地点遺構は堀の外側の建築物と考えた。

南堀 従来、調査地（27）とI地点を結んだ直線的な復元案が考えられてきたが、平成8年のI地点での発掘調査の結果、当該地に堀の無いことが判明した。一方、I地点より北側のC地点（平成6年度試掘）を始めとするほぼ直線的に並んだ5地点で地盤の悪いことが確認されたことや、I地点の南側で平安時代の遺構が確認されていることから、このC地点を取り込む範囲を南堀と考えた。C地点付近の堀幅は、すぐ北で平安時代遺構が確認されていることから約30mと想定した。この南堀は智恵光院通を挟んで屈曲し、調査地（27）を含む窪地に接続する。

西堀 南堀からの屈曲は地盤の悪い地点が密集することから、比較的推定が容易であるが、西堀張り出し部分に関しては推定要素が大きい。B地点は平成3年に試掘調査された場所で、敷地東端から西方向に地山が落ち込んでおり、近世以後の盛土で埋められている。西側張り出し部の推定幅を70m余りとしたが、これは千本通の東側で急激に地盤が落ち込むラインとA地点を基準にしたもので、それぞれ西堀西限・東限とした。A地点は、平安宮跡中央官街群跡調査2である。地表下1.2mで聚楽土の地山を検出したが、西側に向かう落ち込みが検出されており、江戸時代にこの落ち込みが埋没したことが分かっている。また、地表下2.0m以下まで近現代の盛土が確認されているJ地点のすぐ北側で東西方向の標高変化が著しいため、この付近で東に大きく屈曲するものと想定した。再度北側に屈曲する場所及びその幅は、等高線が南北方向に明瞭に移動するラインを目安にしたが、平安時代の遺構が中立売通沿いに確認されるため、比較的幅の広いK・L両地点の間を通ると考えた。

以上のように、現在までの調査データからみた聚楽第の復元を行ったが、代表的な復元案である足利説との相違点を見ていきたい。

第一点は、聚楽第内城の範囲は西堀の張り出し部を想定したことを除けばほぼ同一であることである。特に北堀・南堀の位置は一致する。しかし、I地点・C地点の成果等から南堀が屈曲することは間違いない。そして、地盤の軟弱な地点と平安時代の遺構の残存域、等高線の急激な変

化を総合すると、西堀の張り出し部の存在も妥当であると考ええる。

第二点は、攻城・築城共に経験豊富な秀吉が自らの居城を全く凹凸のない長方形に設定する可能性は低いと考えられることである。実際は今回の復原以上に虎口状の張り出しを多様したであろうし、最外郭である御土居の形態と類似すると考えた方が理解し易い。

最後に、図1のH地点は聚楽第本丸の石垣裏込めと考えられる遺構が確認されている場所である。これは、花園大学日本史学研究会の会員が昭和59年（1984）に発見したもので、足利氏復元の本丸位置と一致する。今後の調査件数の増加でより正確な堀幅等が確認されていくであろう。

（馬瀬智光）

謝辞

聚楽第復元には（財）京都市埋蔵文化財研究所の丸川義広氏から貴重なデータを頂いた。また、南堀出土の平安時代瓦に関しては、京都市考古資料館の原山充志氏・（財）京都市埋蔵文化財研究所の網仲也氏から御教示を得た。同文瓦や瓦の表現に関しては、平安博物館発行の『平安京古瓦図録』（1977年）、向日市教育委員会発行の『長岡京古瓦聚成』（1987年）を参考にさせて頂いた。

註

- 1) 足利氏の復元では、北は一条通、南は下立売通、東は大宮通、西は淨福寺通におおよそ囲まれた範囲を聚楽第内郭としている。「信長、秀吉、家康の城と城下町・前編・後編—歴史地理学と考古学・歴史学—」『京都府埋蔵文化財情報』第53号（1-11頁）・第54号（15-27頁）1994年（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 2) 東堀推定地の発掘調査では、断り割り調査で現地表下5.4mで東に落ち込む地山の肩部を、さらに敷地東端で行ったボーリング調査で地山が観察されたのは同8.4mとなっている。
森島康雄 「平安京跡（聚楽第跡）発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第54冊（119-152頁）1993年（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 3) 八賀 晋 「古代都城の占地について—その地形的環境—」『學叢』創刊号（33-58頁）1979年 京都国立博物館の第7図を利用した。
- 4) 『平安宮Ⅰ』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第13冊）（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年の図61・図版2・図版3を参照した。
- 5) 対象地域の調査は図中に示した地点よりもはるかに多いもの、掘削深度の浅い建物が多いため、そのほとんどが立会調査である。立会調査の場合、工事掘削を越えて地下深く探ることは不可能であり、遺構の有無を判断できないものも多く、今回の調査地点から掘削の浅いものは除外した。

Ⅲ 平安京左京六条三坊九町跡 No.39

1 調査経過

調査地は、京都市下京区室町通松原下元河替町245-2他に所在する土地であり、北半部は2層式ガレージに、南半部には民家が建っていた。この敷地内にマンションの建設が計画されたため、平成9年9月16日に試掘調査を行った。

当地は、平安京の条坊復原(図8)によると左京六条三坊九町の西端部に位置し、敷地の西端は室町小路に該当している。

敷地内には民家等が残った状態であり、試掘調査は、民家裏側に残った空き地(1T)と、立体駐車場の隙間(2T)にトレンチをそれぞれ設定して行った。

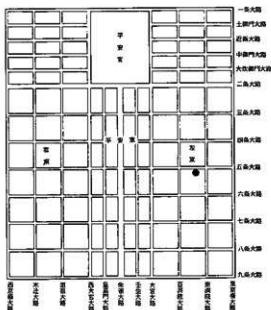


図8 平安京条坊図(調査位置)

2 遺構(図10・図11)

層序 1・2トレンチとも同じ状態で、地表下約110cmまで近世以後の盛土が堆積していた。近世盛土の下層には、中世前期の包含層である暗褐色泥砂層が堆積している。この下層の地表下約150cmで、ぶい黄色砂質土の地山になる。

遺構の検出は、主としてぶい黄色砂質土上面で行い、室町時代を中心とする柱穴・土壇等を検出することができた。

検出した柱穴の多くは、室町時代の小規模な掘立柱建物や構跡に伴うものと考えられる。しかし、各所で近世以後の擾乱の影響を受けており、そのまとまりを把握することは不可能であった。

埋壔 須恵質の壔を利用したもので、中世前期の包含層を掘り込んでいる。埋壔の掘り込みの直径は70cm、深さは68cmであった。埋壔内から大量の土師器皿、瓦質羽釜等が出土した。

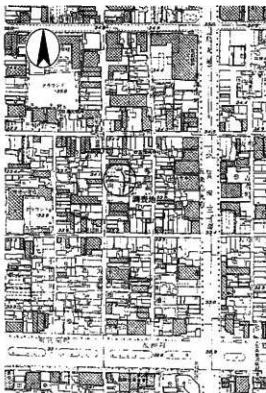


図9 調査位置図(1:5,000)

3 遺物 (図12)

紹介する遺物は、全て埋壙に関連するものである。土師器皿に関しては、口径の計測値を1cm単位でまとめて破片数を計測した(表2)。総破片数は905点である。これらの土師器皿は褐色系と白色系に分離でき、小森・上村編年¹⁾の皿Nと皿S・皿Shを主体とする。しかし、褐色系では皿Nから分離可能なものも一定量認められるため、以下に細分して説明を加える。

褐色系皿 図12の1~28である。口縁部等の加工から、I~IV類と「へそ皿」の5類に分類可能であり、II類とIV類については法量から大小二つに分離できる。I類・II類及び「へそ皿」は、完形に近くないと分類しにくいものが多く、特徴的なものを除き破片計測ではII類に含めた。

I類(2~5)の特徴は、強くナデることにより、口縁部が外方に屈曲することである。ナデ調整の下端で稜がはっきりと現れている。内面は中心部を丸く残して時計回りにナデ調整されている。底部の丸いものが多く、2のように内底面に圏線の巡るものもある。口径は8.1cm前後、器高は1.6cm前後に分布の中心がある。

II類小(6~12)は小森編年Ⅲ~Ⅳ期の皿Nの特徴である、底部周縁に強い指押さえをすることにより、意識的に体部を作り上げたものである。指押さえ部分の器壁が薄くなり、体部と口縁部の境界はI類と同様に稜をなすものが多い。底部は厚く平底を主体としている。12は小森・上村編年Ⅳ期古段階でみられる底部を指頭で少し押し上げたものである。口径は8.1cm前後、器高は1.7cm前後に分布の中心があり、小皿の中で主体的器形である。

II類大(20~28)は平底で口縁端部を上方向に積み上げたものが多い。口径は11cm付近に集中し、器高は2.0cm前後のものが多い。

III類(13~15)は、口縁部をナデた後、その端部を上方向に再度ナデ上げており、内湾ぎみに立ち上がる。また、底部から口縁端部に至るまで器壁が厚く、II類で顕著にみられる指押さえの痕跡がほとんど残っていない。破片数では二番目に多く、8.0cm付近に口径は集中している。

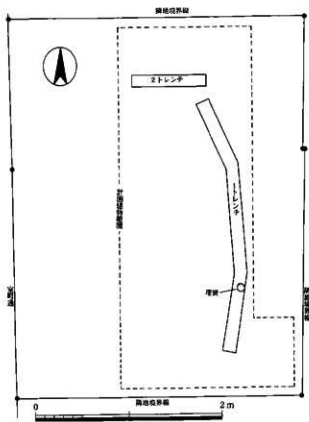


図10 トレンナ位置図 (1:400)

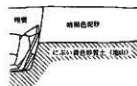
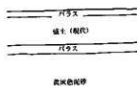


図11 埋壙部分東壁見通し断面図 (1:40)

Ⅳ類小(16~18)の特徴は、口縁部を一段ナデで仕上げ、体部下半を指頭圧で強調しないことにある。破片・完形資料とも口径は8cm台前半を中心としている。

Ⅳ類大(19)は口径の分布が11cm台を中心としたものである。

へそ皿(1)はⅡ類と口縁部の加工が似ている。上げ底にするために、指頭を反時計回りに底部に押し付けている。

白色系皿 口径7.1cm前後、器高2.0cm付近に集中する小(29・30)と、口径12cm台、器高3.0cm前後を中心とする大(31・32)に分かれる。褐色系に比べ器高が高く、器壁の薄いこと、底部のすばまりの強いことを特徴としている。小は「へそ皿」Shであり、底部を指頭で押し上げている。

瓦質羽釜(33) 三脚部分の欠損を除けば完形であり、口径12.6cm、胴部最大径17.4cm、器高9.3cmを測る。三脚接合時の指頭痕が明瞭に残っており、鋳部は外上方を向いている。

須恵質甕(34) 口縁部を含む上胴部がなく、産地は不明である。内外面とも叩き調整の痕跡を、1.8cm程度の幅をもつ板状工具でナデ消している。色調は灰色で、小礫を胎土に多く含んでいる。



写真3 埋壘検出状況(北東から)



写真4 埋壘完掘状況(南から)

口径	I類	II類	III類	IV類	へそ皿	白色系	その他	小計
6cm~		2	1			1		4
7cm~	5	48	19	3		8	2	85
8cm~	19	88	52	15			5	179
9cm~	4	54	11	4	1	1	6	81
10cm~	1	148	1	1		2	4	157
11cm~		210	1	1		19		231
12cm~		120		2		10		132
13cm~		28				8		36
総計	29	698	85	26	1	49	17	905

表2 埋壘内出土土師器皿類破片点数

4 まとめ

この遺跡の所在する元両替町は、南北に通る室町通(室町小路)を挟む両側町であり、江戸時代の絵図には「本両替町」、「元両替町」の文字が認められるが、町名の由来は不詳である。江戸時代には、釘鍛冶・薬屋・塗物店等の存在が知られているものの中世の状況は不明である²⁾。

今回検出された埋甕の年代は、小森・上村編年の平安京Ⅷ期新段階からⅧ期古段階（14世紀中頃～後半）のものと考えられる。寛や土師里に付着して釘が複数出土しており、昭和63年に発掘された吉田近衛町遺跡S151墓³⁾と状況が類似している。S151墓の釘は火葬骨を入れた木箱に使われたものと推定されており、当遺跡の埋甕も埋葬用に使用された可能性が高いと考えられる。

(馬瀬智光)

謝辞

埋甕内の出土遺物に関しては、(財)京都市埋蔵文化財研究所の平尾政幸氏のご教示を得た。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号 1996年(187-271頁)(財)京都市埋蔵文化財研究所
- 2) 『京都市の地名』日本歴史地名体系27 1979年(913頁)を参照。
- 3) 『吉田近衛町遺跡』(『京都文化博物館研究報告』第4集)1989年(財)京都文化財団の43~44頁参照。

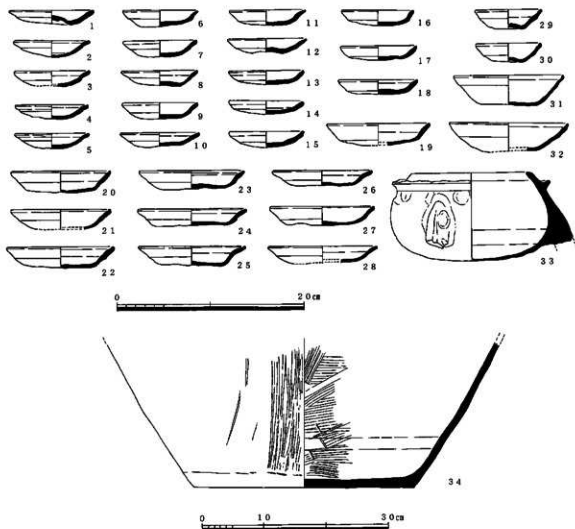


図12 埋甕内出土土器実測図(1:4)・埋甕実測図(1:6)

Ⅳ 平安京右京六条四坊二町跡 No.11

1 調査経過

調査地は、右京区西院清水町161番地に所在する染色工場の跡地である。平安京の条坊復元では、右京六条四坊二町の北東隅付近に位置する。また、平安京下層遺跡である西京極遺跡の範囲内にも含まれている。

周辺の調査例には、当地から西方へ70mほどの地点でマンション建設に先立って（財）京都市埋蔵文化財研究所が「平成元年度に発掘調査」を実施している。この調査では条坊関連遺構としては樋口小路南側溝を発見したのみであるが、西京極遺跡に関連した弥生時代の竪穴住居跡を5棟発見したことにより集落が確認されている。さらにその西方にあるマンション「マンハイム五条」の事前調査では弥生時代中期の溝を1条発見している。また南側では五条通に面した西院六反田町のビル建設に伴う立会調査²⁾で弥生時代中期の東西溝と当該期の南へ落ち込む沼地状の地形を確認している。

今回の試掘調査は、鉄骨造の事務所建設に伴うもので平成9年1月17日に行った。調査地は南北に細長い敷地のため敷地中央に南北トレンチを設定して行った。その結果、トレンチの北寄り以北へ向かって緩やかに落ち込む流路状の堆積を発見し、埋土から古墳時代後期の須恵器などが出土した。

2 遺構・遺物

敷地南半部の層序は上から盛土・耕土・床土・褐灰色砂泥（中世整地層）・黄褐色砂泥（地山）で地山検出面は地表下60cmと非常に浅い。

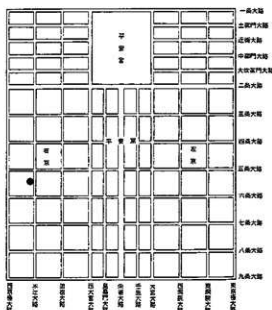


図13 平安京条坊図（調査位置）



図14 調査位置図（1：5000）

北側では地山検出面が1m前後とやや深くなり、その上に堆積する整地層が分厚くなっている。地山面での旧地形は南側が高い微高地を呈していたようで、中世の耕地化に伴ってフラットな土地に改良されたと推察される。

発見した遺構にはトレンチの北寄りでも小土壇と流路状の落ち込みがあり、南側では地山が浅くなる関係から旧建物の基礎などによる擾乱が著しくなり、顕著な遺構は確認できなかった。

流路 トレンチの北端寄りでも、地山が北に向かって下る落ち込みを検出した。この落ち込み内の堆積土を観察すると、粘土とシルトが互層に堆積し、水が流れていた時期と澁んでいた時期とがあったようで、一応流路と推定した。流路は北東から南西の向きを持つが、流れの方向までは明らかにし得なかった。流路の深さは検出面から約1.6mまでを確認した。幅については直接確認できなかったが、トレンチから約6m北に離れたところで壺掘り掘削を行った結果、流路を示す痕跡が認められなかったことから5m以上11m以下の幅に推定できる。

この流路の埋土、特に肩口から須恵器を中心とした古墳時代後期の土器類が出土した。図17に掲載した須恵器の内2の杯蓋（口径14cm・器高4.3cm）、3の杯身（口径16cm）、4の壺（胴径17.5cm）が流路からの出土品である。これ以外に須恵器の大壺（口径52cm、胴径90cm）なども出土した。

土壇 流路の肩口で発見した直径50cm・深さ30cmの小土壇である。埋土から古墳時代後期の

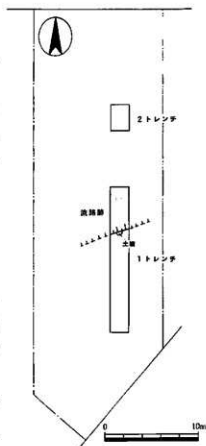


図15 トレンチ位置図 (1:400)

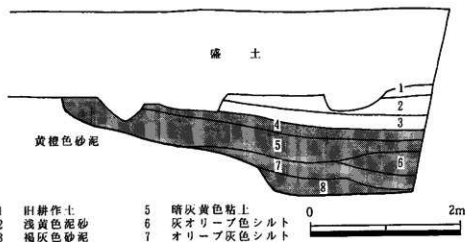


図16 1トレンチ北端西壁土層図 (1:50)

須恵器短頸壺（口径7.7cm・器高6.4cm）が出土した。

3 まとめ

これまでに周辺地で発見された西京極遺跡に関連する遺構は、弥生時代後期が中心であった。今回、流路内から出土した土器は古墳時代後期が主で、土器表面に磨耗痕もほとんど見られないことから、

流路の南側の微高地に当該期の居住地などが推定される。

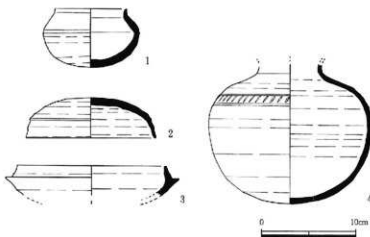


図17 出土土器実測図（1：4）

（長谷川行孝）

註

- 1) 上村和直・西大條督「26平安京右京六条四坊・西京極遺跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 2) 鈴木廣司「右京六条四坊跡立会調査」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和54年度京都市文化観光局文化財保護課 1980年



写真5 流路跡（北東から）

V 西寺跡 No.52, No.53

1 はじめに

平成9年度は西寺旧境内地で2箇所、試掘調査を行った。No52地点は西寺西限築地からその外側にかけての場所であり、西大宮大路東側溝を発見した。No53地点は西寺の中心伽藍の一面、西僧房推定地であり、僧房の整地土を確認した。以下にその概略を報告する。

2 No.52地点調査地

1 調査経過

調査地は東寺西門通と御前通の交差点南東隅に位置する南区唐橋西寺町36番地である。ここに在る飲食店が2期にわたって増改築工事を計画したため、1期の工事分は4月に立会調査を行い、2期の工事については6月12・13日の二日間にわたって試掘調査を行った。

この場所は西寺西限築地と西大宮大路東側溝及び路面などの推定ライン上にあることから、調査は東西方向のトレンチを2箇所設けて行った。その結果、敷地の東端付近で築地の犬行部分と東側溝などを検出した。

2 遺構・遺物

調査地の基本ベースは暗青灰色泥土で、地表下0.8m以下に1m以上も厚く堆積し、かつては湿地帯であったことが窺える。

犬行 犬行はベースの泥土の上に礫を多く含んだ褐色砂泥を積土して築かれていた。この積土は35cmほどの厚みがあり、締め固められていた。犬行の幅は1.6m程あり、西側の西大宮大路東側溝の肩口に向かって緩やかな下り勾配がつけられていた。犬行の東側、築地基底部の推定域は、近代の南北溝で攪乱されていたこ

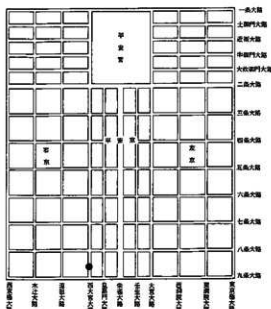


図18 平安京条坊図 (調査位置)

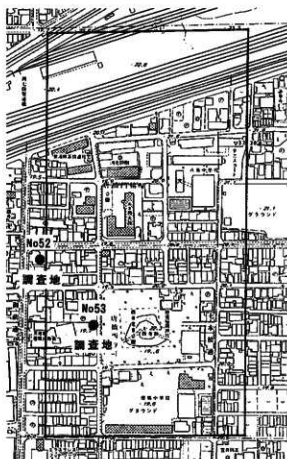


図19 調査位置図 (1:5000)

と隣地境界に近いため明確にし得なかった。

側溝 西大宮大路東側溝は幅2.2m・深さ0.3mあり、ベースの暗青灰色泥土を掘り込んで造られている。埋土は褐灰色泥土である。溝の東肩部は犬行と一体のため明瞭であるが、大路側の西肩部はやや不明瞭で明確な大路路面の痕跡も確認できなかった。

井戸 1トレンチの西寄り西大宮大路東側溝を切り込んで掘られた室町時代の石組み井戸を1基検出した。井戸の平面形は円形で内法直径が約0.9m、掘形の直径が約1.5mあり、地表面から2.2m下にある明黄褐色砂礫層まで掘り下げている。石組みの石材はチャート系の自然石で20～30cm程度の大きさのものが主である。残存する高さは約1.2mあり、底部に直径約40cmの曲げ物を据え置いている。この井戸の埋土からは室町時代後半の土師器皿（ヘソ皿）や平安時代の軒平瓦（図22）等が出土した。

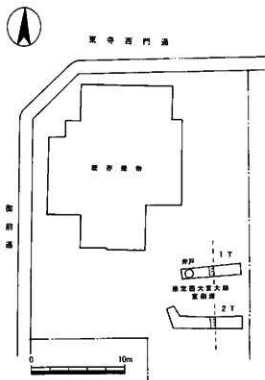


図20 トレンチ位置図 (1:800)

3 まとめ

当調査地から40mほど北側に離れた所を平成2年に関西文化財調査会が発掘調査している。この調査では、西寺の寺域に関連する西大宮大路の東側溝や西寺西限築地及び北限溝などが発見された。また、江戸時代から室町時代の溝・土城・井戸なども検出されている。

今回の調査では、西大宮大路の東側溝から西寺西限築地の犬行までを確認したが、築地本体の基底部分は東側隣接地との境界付近に想定でき明確にし得なかった。また西大宮大路については側溝を検出したにもかかわらず、路面部分については既に削平されたのか、明確な痕跡を検出できなかった。

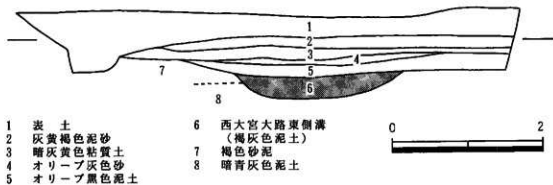


図21 2トレンチ南壁土層図 (1:50)

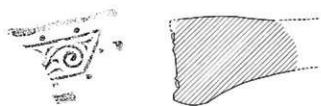


図22 軒平瓦拓影及び実測図 (1:3)



写真6 2トレンチ側溝部分 (北東から)



写真7 石組み井戸 (西から)



写真8 調査地全景 (西から)

3 No.53地点調査地

1 調査経過

調査地は、南区唐橋西寺町28-2番地で、西寺児童公園の西側に位置する住宅街である。この土地で住宅の建替工事が計画されたが、当地が西寺の伽藍推定復元では西僧房跡に該当することから工事前の平成9年7月16日に試掘調査を行った。調査は敷地の南辺と西辺に沿ってL字形にトレンチを入れて行った。その結果、表土直下で小穴と西僧房の基壇土を確認した。

2 遺構

調査地は厚さ20cm前後の表土下に西寺西僧房の基壇土と考えられる黄褐色泥砂層が一面に広がる。基壇は地表下55cm以下に堆積している地山の砂礫層の上に褐色系の泥砂を三層ほど積み上げて築かれているが、基壇化粧材等は発見出来なかった。この基壇上の上面で柱穴2基を検出した。柱穴は掘立柱で南北に3.4m離れ、掘方の直径約40cm・深さ約30cmあり、柱の直径は20cm前後と推定される。

3 まとめ

今回の調査では表土直下で西僧坊の基壇土と推定される盛土を発見したが、礎石抜き跡など直接僧坊の間取りが分かるような遺構は検出出来なかった。これは、当該地の南側で実施した第19次発掘調査¹⁾でも同様の結果を得ており、僧坊基壇の上部がすでに削平されているものと思われる。

(長谷川行孝)

註

- 1) 長宗繁一 第三章第3節「第19次発掘調査」『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度(財)京都市埋蔵文化財研究所 1981年

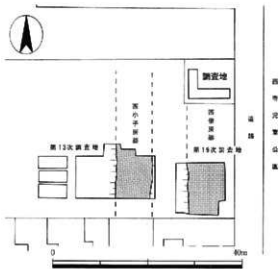


図23 トレンチ位置図 (1:800)

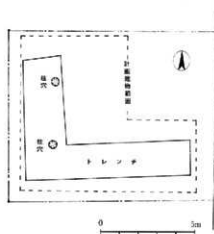


図24 遺構略図 (1:200)

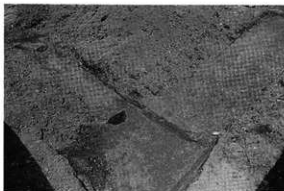


写真9 調査地全景(南西から)

VI 平安京右京九条二坊八町跡 No54

1. はじめに

試掘調査を行った場所は、京都市下京区梅小路高畑町5-1.6-1.7-1の西大路通八条東入二筋目南西の角地で、かつて芹畑であった東西に長い長方形の土地(約2,985㎡)である。

当該地のすぐ南方にはJR東海道本線が通り、条坊では北が八条大路、南が針小路、東が西観負小路、西は西堀川小路に囲まれた一町内(右京九条二坊八町)の東北約四分一に当たる土地である。

この付近から南東方の西寺跡にかけては、平安京跡下層遺跡である弥生時代から古墳時代の集落跡である唐橋遺跡があり、また、今回の調査地のすぐ東方にあるJR梅小路機関区内敷地からは、平成4年2月に実施し

平安京条坊図

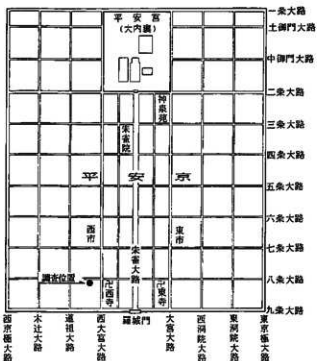


図25 平安京条坊図(調査位置)



図26 平安京条坊復元と調査位置図(1:5000)

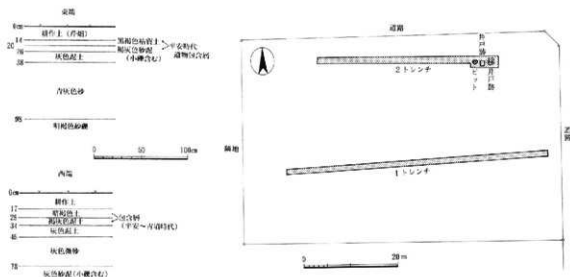


図27 トレンチ位置図と1トレンチ土層断面略測図

た試掘調査で古墳の周濠跡が偶然発見され、周濠内からは細片となった円筒埴輪の破片が多数出土し、平安京造営の際に破壊されたとみられる古墳が初めて確認されている。¹⁾

当該地については、マンション建設に伴う事前試掘調査として、調査面積約130㎡を対象に、平成9年5月26日に実施し、東西方向に二本のトレンチを設けて重機掘削を行った。

2. 調査内容

(1) 1トレンチ 南側に幅1.3mのトレンチを東西56.5m (面積73.45㎡)の長さで設け、東側から機械掘削を行った。

トレンチの東端では、芋畑の耕作土直下の床土に平安時代の土師器・須恵器などの細片が混じり、さらに地表下30cm程の浅い所で、シルト質の微砂層及び砂礫層の無遺物層となることから、遺構面は地表下20～30cmの範囲と判明、重機を使って慎重に掘削調査を行った。ただし、西脇負小路西側溝及び邸宅内溝は検出されなかった。

掘削範囲内には有力な遺構を検出することはできなかったが、トレンチの中央から西半にかけては、耕作土下の床土直下から地表下50cmの間の土層に、古墳時代とみられるの遺物破片が認められたことから、慎重に精査を行ったが、住居跡・溝跡などの遺構は検出できなかった。

また、トレンチ西端では、床土直下から砂礫堆積土が現れ、敷地の西域には、東北から西南方向へ流れる流路か洪水堆積の跡であることが判明し、この場所には重要遺構・遺物は存在しないことが判明した。

(2) 2トレンチ 敷地北側に、幅1.2mのトレンチを東西38.9m (面積約47㎡) 設け、西側から掘削を行った。

西端では、西へ下る腐食土の入った大きな溝跡または



写真10 1トレンチ全景 (西から)

沼状遺構を検出したが、出土遺物がなく、規模や時期は不明である。また、中央から東にかけては、1トレンチと同じく砂礫の堆積土が極めて浅い所から表れ、深さは1m以上に達することから、ここには遺構面は存在しないものと判断した。

トレンチの東端では、砂礫質の土層の浅い所から方形の木製枠組の井戸1基、土壇状の井戸1基と方形土壇1基を検出し、東端を6m程南へ拡張(面積53.88㎡)して遺構検出を行った。

(3) 遺構

井戸跡2 東西1.2m・南北1.0mの掘形に、幅12cm(4寸)、厚さ約2cm、長さ183~189cmの長方形の木材

を四つに組んだ方形の井戸枠を検出した。井戸枠の背面には縦材の木片の痕跡が4箇所残っており、縦板材を打って井戸壁を構築していたことは明らかである。

また、今回確認した井戸底は、耕作土下の床上面から底までの深さは45cm程しかない。

井戸の中からは、底部のみ欠損している船載の白磁四耳壺が1個体分が出土した。

この井戸が埋没した時代は、出土遺物から平安時代末期から鎌倉期頃と推定される。

井戸跡1 井戸2の東、井戸の心々距離で1.8mの位置から、井戸の底部とみられる方形の土壇状遺構を検出した。底近くには拳大の石が存在し、完形に近い瓦器碗1個と土師器皿3枚が出土したが、いずれも完形に近く、井戸として機能していた頃に、井戸内に落したものが、あるいは、



写真11 2トレンチ全景(西から)

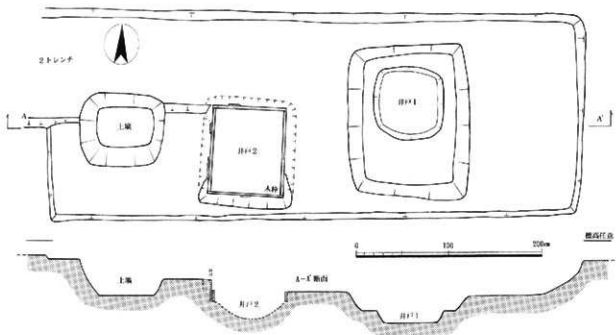


図28 検出遺構の平・断面実測図(1:40)

井戸廃止に伴って祭祀的に鎮められたものかの、どちらかと考えられる。

方形土壇 木枠が残る井戸2の西50cm程のところで検出した。

南北40cm・東西90cm程の隅丸方形で、柱根の痕もなく、床土層下から底までは37cm程（現地表面から約60cm）しかないことから、井戸に関連した建物か、または井戸近くに何らかの施設があった可能性もあるが、残存状況不良のため性格不明の遺構である。

3. 遺物

遺物はコンテナに2箱ほど出土しているが、耕作土下の床土層以下の薄い土層（遺物包含層）からは、平安時代以外に古墳時代とみられる甕の細片も出土している。

平安時代の遺物には、井戸1, 2から出土した白磁四耳壺・瓦器碗・土師器皿などがある。

1～7の土師器は井戸1の底部付近から出土したもので、ほかに土師器の小破片もある。

1～5は直径10cm前後、器高も1.5cm前後のもので、6は直径がやや大きく、ナデ・オサエ成形、7は直径11.2cmで、底部裏に「ろ」「己」を重ねたような墨書が残る。いずれも平安京V期中～新（12世紀後半）頃のものともみられる。また8の瓦器碗は、器高6.2cmで、口径は15～15.7cmとやや楕円形、ほぼ完形で井戸1の底から出土した。

9の白磁四耳壺は、井戸2の底から唯一出土した遺物で、肩から胴の一部と高台部分は欠損しているが、外見はほぼ完形。器高23cm、肩部直径18cm、口径（頂部）10cmで四つの横耳に沿って沈線を巡らせる。同形の完形壺2点が久寿2年(1155)建立の大蔵御堂（醍醐柵社遺跡八角円堂跡）からも出土しており、12世紀中頃に宋から舶載されたもので経塚の容器や外容器などに使用された例も多く、平安京跡では1995年に左京北辺三坊跡（新町小学校）から完形の白磁四耳壺（13世紀後半）が1点出土している。²¹

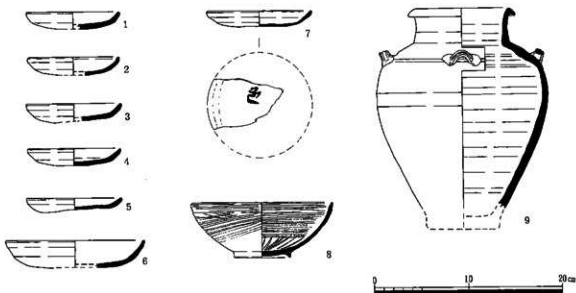


図29 出土遺物実測図 (1:4)

4. まとめ

今回調査場所の右京九条二坊八町は「拾芥抄」西京図には植松領とし、東寺領の荘園とされる。この付近における既往の調査例では、低湿地状の土地が多いことがあげられるが、この敷地の中央から西南側にかけて流路状の砂礫堆積があり、さらに敷地西端は大きな溝跡あるいは池状の湿地であったことも判明した。いずれも時期は不明ながら、河川の氾濫域が存在していたことは明らかで、かつて平安京遷都以前（弥生～古墳時代）には、流路以外の微高地状の土地には住居が築かれ、集落が形成されていた可能性が高いことが改めて裏付けられた。

平安時代の遺構は、敷地の東域で遺物を包含する土層を確認し、さらに敷地の一部で平安時代後期から鎌倉時代にかけての井戸跡を検出したが、建物跡などは検出できなかった。

今回の調査地西側では流路状の砂礫堆積及び溝状の湿地であることを確認したが、かつて、この二坊八町の西側には南北の西堀川小路があった。

西堀川小路は、既往の調査³⁾⁴⁾により、小路両サイドの築地心々間距離は24m(8丈)で、道路の中央に幅約6mの堀川が流れ、その両サイドに幅5.7～5.8mの道路があって、側溝は幅約1.9mと判明しているが、今回調査場所の西側辺りまで堀川の氾濫域が存在していた可能性がある。敷地内の東北部で検出した2箇所の井戸跡は、いずれもある程度深い位置で検出されるはずの井戸底が極めて浅く検出されることから、付近全体が芥畑などに開墾される段階で、大きく遺構面が削平された可能性があり、敷地全体の遺構の残存状況は良くないと判断した。

なお、検出した2基の井戸は同時期に存在したとは考えにくく、若干の時代差があるとみられるが、上部構造も明確ではなく、はっきりしたことは分らない。(梶川敏夫)

註

1) 「京都市内遺跡試掘調査概報」平成4年度、京都市文化観光局、1993年

2) 鈴木廣司・山本雅和「平安京左京北辺三坊」(『平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要』所収、(財)京都市埋蔵文化財研究所、1997年)

3) 平方幸男・高橋 潔「平安京右京四条四坊」(『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』所収、(財)京都市埋蔵文化財研究所、1988年)

4) 平尾政幸・辻純「右京三条二坊」(『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』所収、(財)京都市埋蔵文化財研究所、1984年)



写真12 井戸跡1(手前)と井戸跡2(東から)

Ⅶ 小野瓦窯跡 No.57

1 調査経過

調査地は、左京区上高野小野町10番地で、高野川が北東方向に曲折する地点の北方にある。西側隣接地には崇道神社御旅所（通称オカイラノ森）である小丘が存在し、現在でも地表には多くの瓦片が散在している。従来、窯跡本体は発見されていないものの、この小丘で発見された「小乃」銘瓦が平安宮跡でも出土することから、「延喜式」木工寮の項に記載されている小野瓦屋と推定されてきた。

今回、オカイラノ森に隣接した当地に宅地開発が計画されたため、窯跡本体及びその関連施設の確認を目的とした試掘調査を行うことになった。調査は平成9年10月1日に行った。

調査の結果、東西溝1条、大型の落ち込み1基、「木工」銘の平瓦や溶着した瓦片を検出することができ、当遺跡が小野瓦屋である可能性が高まった。

2 遺構 (図31・図32)

敷地の南半部には池が設けられており、今回の宅地開発で計画されている道路部分にトレンチを設定した。トレンチの規模は幅0.8～1.2m、長さ21mである。

層序 トレンチで確認できた層序は基本的に同一である。上から灰色泥砂（表土）、旧耕作土、黄灰色粘質土（床土）と続き、地表下36cmで瓦片を多く含む灰黄褐色泥砂層が認められる。この層の下層の地表下



図30 調査位置図 (1:5,000)

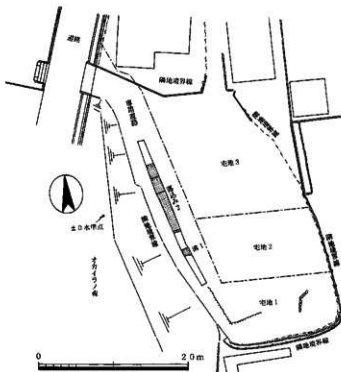


図31 トレンチ位置図 (1:500)

80cmにおいて、地山である灰オリーブ色砂質土が存在する。検出した遺構は全てこの地山上で認めた。

溝1 幅1.1m、深さ44cmを測る東西溝(写真13)であり、その埋土は4層に分層(図32)できる。特に最上層の灰オリーブ色泥砂層に瓦片が集積した状態で見つっており、その集積内で、「木工」銘平瓦・溶着した瓦片・炭を確認することができた。

落ち込み2 地山である灰オリーブ色砂質土を掘り込んでおり、南北長9.7m、最深部で1mの規模をもつ大型の土坑である。南からの落ちが緩やかである一方、北側は二段落ちになっており、二段目から最深部に急激に落ち込んでいる。今回紹介する遺物の大半はここから出土しており、軒平瓦を含め非常に多くの瓦片を検出することができた。

3 遺物(図33)

出土遺物の大半は瓦片であるが、地山直上で円盤状高台をもつ緑釉陶器の素地を発見した。

軒平瓦 図化したのは5点である。種類のには2～5と6の2種類に分けられる。この2種類とも従来の小野瓦窯の表面採集品には認められないものである。

2から5はいずれも中心飾りを欠くものの、同文瓦が昭和63年に(財)京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を行った豊楽殿跡から出土¹⁾している。また、『平安京古瓦図録』でも豊楽院跡及び朝堂院跡出土のものに同文瓦²⁾が存在している。これらによると、中心飾りは対向C字形で、その左右に緩やかに反転する唐草が配されている。

均整唐草文軒平瓦である2から5の范への押し付けは個体ごとに異なるが、上外区の珠文は大きく、下外区の珠文が小さい傾向にある。上外区の珠文は2cm間隔、下外区の珠文は1.8～2cm間隔で配されている。描かれている唐草の葉は太く、雁状の先端をもつ子葉が主葉上方に置かれる。周縁は削られ、上部は布目瓦痕を有するが瓦当部は横方向にナデられている。裏面は縦方向に削られ、額部は横ナデ調整がなされている。2は特に唐草の磨減が著しい。

6の均整唐草文軒平瓦の同文瓦が平安宮朝堂院跡から出土³⁾している。この同文瓦は緑釉軒平瓦であり、中心飾りは対向C字形で先端を二叉にし、子葉を配する等複雑である。唐草文は左右外行2転式で、子葉を多く配している。これを参考に見ていくと、6では第2単位の主葉先端部

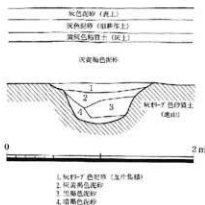


図32 溝1部分西壁土層図(1:40)

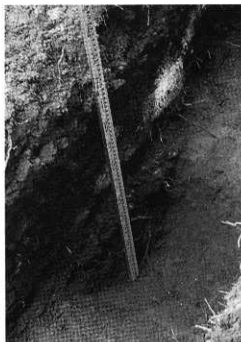


写真13 溝1完掘状況(西北から)

とそこから伸びる子葉の広がりのみが残存しているのがわかる。同文の軒平瓦と同様、瓦当への范の押し付けは上方で深く、下方で浅い。そのため、上外区の珠文の出が5mmあるのに対し、下外区の珠文の出は1.5mmしかない。また、瓦当面には木目痕が見られ、瓦当凹部は横方向にナデられている。周縁はヘラ削りで調整されている。胎土中には金雲母等の砂粒を多く含み、焼成は軟質である。

平瓦 1の平瓦は裏面に縦3.7cm、幅1.5cmの押印で「木工」と記されている。表には縦方向の叩きが施された後、端部をハケ状工具でナデ消している。裏面には布目痕が残り、ちょうど中央部に焼成時のひび割れが残っている。

4 まとめ

検出した遺構の性格を考えていくと、まず溝1は窯に伴う排水溝ではないかと考えられる。遺

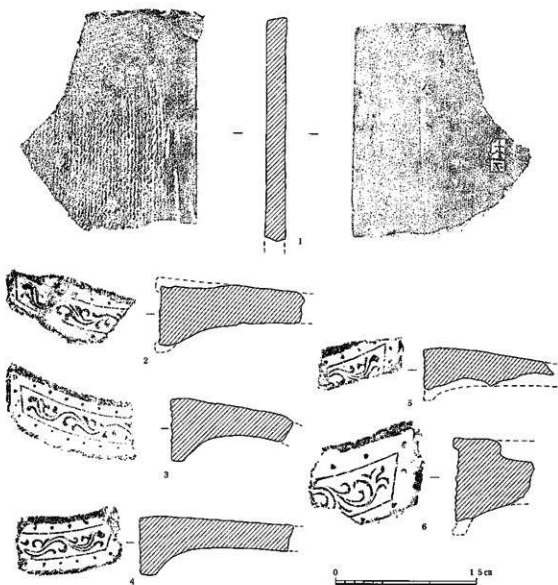


図33 出土瓦拓影及び実測図 (1:4)

物は埋土上層に集積しており、排水機能の終焉と共に埋められたのではないだろうか。

落ち込み2は灰原の可能性もあるが、焼土片や炭等が少なく、粘土採取の土壌の可能性も考えられる。

竈跡本体及び灰原を確認することはできなかったが、この調査によってオカイノ森である小丘の東側平坦地部分には竈跡のないことがわかった。木村捷三郎氏は「遺瓦はこの小丘の南部に多く、大型の破片も散在しており、地中にはなお多数埋没されている。」⁴⁾と記しており、崇道神社御旅所の正面入り口付近（南側）に竈跡本体の存在する可能性が高くなった。

従来からこの遺跡の表面採集品に「小乃」銘軒平瓦が存在していたが、今回「木工」銘の平瓦を検出したことで、当遺跡が木工寮に属する官営瓦屋である小野瓦屋に相当する可能性が極めて高くなった。

(馬瀬智光)

謝辞

瓦については、豊楽殿跡の発掘を担当された（財）京都市埋蔵文化財研究所の鈴木久男氏と、京都市考古資料館の原山充志氏に御教示を頂いた。

註

- 1) 鈴木久男 「平安宮豊楽院（1）」『平安京跡発掘調査概報 昭和63年度』（京都市文化観光局）1989年 図4の6と同文。
- 2) 『平安京古瓦図録』（平安博物館）1977年 拓影376・377と同文。
- 3) 『平安京古瓦図録』（平安博物館）1977年 拓影413と同文。
- 4) 木村捷三郎「平安中期の瓦についての私見」『造瓦と考古学』1976年の169頁。

Ⅷ 長岡京跡 No.89, No.90

1 調査経過

調査地は伏見区羽東師菱川町585他にある水田跡で、調査時点では既に土砂が入られ埋め立てられていた。周辺の水田は近年急速に宅地化が進み、木造住宅建設に伴う宅地造成が盛んに行われている地域である。これに伴って試掘調査も平成5年度から毎年1件程度実施している。また、昭和55年度から行われた西羽東師川の河川改修に伴う発掘調査では当該地の北方で長岡京の南北路の東三坊大路両側溝を検出している。

今回の調査は隣接する2枚の田に対してそれぞれ別個に木造住宅建設に伴う宅地造成が計画されたため、埋蔵文化財調査センターが平成9年8月20日と9月8日に試掘調査を実施したものである。

まず8月20日の調査では、東西方向にトレンチを3本重ねて遺構検出を行った。その結果、西端のトレンチ(1T)と中央のトレンチ(2T)でそれぞれ南北溝を検出した。南北溝は1トレンチでは1条、2トレンチでは東西に2.6m距てて2条認められた。1トレンチの溝から2トレンチの西側の溝まで約24m測ることから、その間を三坊大路と判断し、溝を側溝と考えた。また2トレンチでは溝を2条検出したことから、東の1条は内溝と推定した。これらの調査成果をもとに9月8日の調査では、東西両側溝の延長上にトレンチを設定した。西側溝を検出目的とした4トレンチでは、産業廃棄物の埋め立てによる攪乱が著しく遺構面を確認することが出来なかった。しかし東側溝については当初の推定どおり溝を検出した。ただし溝は1条しか確認できず、内溝と推定した溝の延長は確認できなかった。

2 遺構

調査地の基本層序は単純で盛土(厚さ約1m)の下に耕土・床土・灰色粘土が堆積し、その下層は灰オリブ粘質土(地山)となる。溝などの遺構検出面は灰オリブ粘質土の上面である。なお、4トレンチでは粘質土の地山は認められず、専ら河川氾濫を示す砂礫層の堆積であった。

西側溝 1トレンチのみで検出した溝である。溝の幅は約1m、深さは0.2mと浅く、埋土は灰色泥土である。遺物は出土せず。



図34 調査位置図(1:5000)

東側溝 南北に25m離れた2及び5トレンチで検出した溝である。溝の幅は1.4～1.7mと西側溝よりやや広く、深さは0.4～0.5mあり西側溝より深い。埋土は灰色から褐灰色系の泥土で、わずかに土師器細片と木片が出土した。

東側溝内溝 2トレンチだけで検出した溝である。溝の幅は約1.3m、深さは0.3mと浅く、埋土は灰色泥土である。遺物は発見出来なかった。

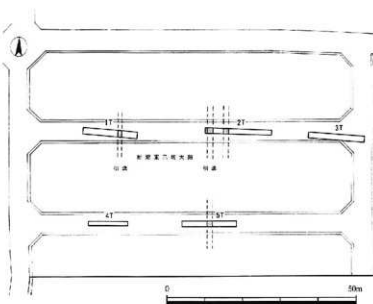


図35 トレンチ位置図 (1:1000)

3 まとめ

今回の調査で100mほど離れた西羽東師川の河川改修に伴う発掘調査で確認された東三坊大路の両側溝が当該地にもつづくことが判明した。また、約500m南下した外環状線道路に伴う発掘調査やその北側で当センターが実施した試掘調査等でも大路側溝が見つかることから当地域には確実に溝が残存していることが明らかになった。

(長谷川行孝)



図36 5トレンチ北壁土層図 (1:50)



写真14 1トレンチ全景 (西から)



写真15 5トレンチ全景 (東から)

表3 試掘調査一覧表

平成8年度 1～3月期

平安宮

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
梨本・聚楽部跡	上・智恵光院通上長者町下る下里山町243	3/7	近世土壌1基を抽出。	1
采女町	上・土庫通出水上る辨天町317	1/28	地表下1m以下近世の整地層。	2
采女町	上・千本通出水上る弁天町315-1	2/17	地表下1m以下、砂礫層の堆積。遺構・遺物ともに発見出来ず。	3
朝堂院	中・聚楽部南町37	1/20	GL-0.75mで地山。遺構は発見出来ず。	4

平安京左京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
二条二坊九町	中・丸太町通小路西人丸太町20-3他	3/14	GL-1.6mで高陽院の圓池の一部を抽出した。発掘調査を指導する。	5
二条三坊九町	中・丸太町通富町東入常真横町188,188-2	1/16	GL-1.7mで中世の東西隔跡。	6
五条一坊八町	中・壬生賀陽御所町71他	3/17	GL-1.5mで中世から近世にかけての柱穴・土壌などを抽出。	7

平安京右京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
三条四坊七町	右・山ノ内御堂横町27	3/19	遺構・遺物ともに発見出来ず。	8
四条一坊一町	中・壬生天地町1	3/24～2	敷地の北下部では平安時代の遺物包含層を抽出する。発掘調査を指導する。	9
六条三坊二町	右・西院寿町7,西院西寿町29	3/10	遺構・遺物ともに発見出来ず。	10
六条四坊二町	右・西院清水町161	1/17	GL-1.1mで古墳時代の流路跡を抽出。本文18頁	11
九条三坊二町	南・吉祥院西ノ庄東理養町126他	3/28	花川の沓形堆積のみ。	12
九条三坊十四町	南・吉祥院中河原里北町56	3/12	GL-1.5mで砂礫層。遺構・遺物ともに発見出来ず。	13

洛北地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
植物園北遺跡	北・上賀茂向繩手町61他2筆	3/5	敷地北西隅で掘立住建物1棟を発見する。	14
引籠寺跡	上・千本通寺ノ内上る西五辻北町427	1/30	地表下0.4mで地山の黄色粘質土。遺構・遺物ともに発見出来ず。	15

北白川地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
北白川横寺跡	左・北白川上別当町7	2/28	GL-1mで古墳～飛鳥時代の柱穴数個、平安時代の土壌を抽出する。	16

洛東地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
山科水願寺跡	山・西野左義長町16,16-16,23-1の一部他	2/3～5	本願寺の土壇の延長や、焼土層、路面等、具体的に寺内町の家屋配列と遺跡全体の区画の推定が可能な遺構を抽出。発掘調査を指導する。	17
法性寺跡	東・本町十五丁目749	2/10	敷地西半分で平安時代の包含層、中世の土壌などを地表下0.3mで発見する。	18

鳥羽地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
鳥羽離宮跡	伏・田中宮町23,24,24-1	1/8	中世の遺物包含層が敷地の北半を中心に覆う。	19
鳥羽離宮跡	伏・竹田園川町16	1/13-2/24	GL-1.75m以下は湿地状堆積で、GL-2.5m以下は砂層の堆積のみ。	20
鳥羽離宮跡	伏・中島前山町5-1	1/23	湿地帯を埋め立て耕作地化している。鳥羽離宮関連の遺構は発見出来ず。	21

南・桂地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
藤城跡	右・西京極東衣手町84-1,89	2/26	地表下1.7mまで能て積み上で、最下層の砂礫層からも土師器の断片が出土した。	22

長岡地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
長岡京跡	伏・久我木町11-260	2/13	遺構・遺物伴に発見出来なかった。	23
長岡京跡	伏・久我西出町11-17,18,19	2/19	GL-0.8m以下、湿地状堆積。	24

平成9年度 4～12月期

平安宮

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
大藏序	上・仁和寺街道七本松西二番町192	4/16	GL-2.1mまで近世の敷地層。遺構・遺物ともに発見出来ず。	25
大膳職	上・日暮通榎木町下る北伊勢屋町733	5/21	近世の敷地層のみを確認する。	26
内裏・紫雲第跡	上・智恵光院通出水下る分洞町575	12/8	紫雲第の廊跡中央部と考えられ、石垣等は存在しなかった。本文3頁	27
朝堂院	上・丸太町通千本東人中藤町491	9/1	香壇基壇は倒壊されたのか、検出できず。	28
典薬寮跡	中・京ノ京車取町8	10/22	地表下約1mで地山の粘質土。遺構・遺物ともに発見出来ず。	29
豊楽院跡	中・紫雲閣西町186	12/3	平安時代の瓦片を含む溝を2条検出。	30

平安京左京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
二条三坊六町	中・室町通奥川上る鏡理町38	4/21	GL-2mで砂礫層。中世の土器を検出する。	31
四条一坊四町	中・壬生御所ノ内町23-1他	9/29	GL-1mで平安時代の由北溝を発見。発掘調査を指導する。	32
四条一坊十二町	中・壬生坊城町6	8/18	遺構・遺物ともに発見できず。	33
四条二坊十三町	中・西院通錦小路下る鐘廊山町467他	10/6-13	平安時代から院山時代にかけての土器や漆などを検出した。発掘調査を指導する。	34
四条三坊十六町	中・東洞院三条下る三文字町205-1,204他	11/19	GL-2.1mで中世の柱穴4基。	35
五条一坊五町	中・壬生相合町62-1他	7/7	中世の粘土探掘層を多数検出した。	36
六条一坊五町	下・中堂寺鐘田町10	9/10	粘土探掘層と考えられる大型土器を検出する。	37
六条三坊二町	下・西筋町23,25-1,27	8/11	GL-0.84mで中世から近世の土器等が発見。	38
六条三坊九町	下・室町通松原下る両替町245-2他	9/16	GL-1.5mで室町時代の上層・柱穴などを発見。本文14頁	39
七条四坊四町	下・東洞院七条上る船屋町260	9/12	GL-2.4mで鎌倉時代の井戸1基を発見。	40
七条四坊六町	下・河原町通正面下る万屋町342他一帯	6/10	鴨川の氾濫により遺構・遺物発見出来ず。	41
史跡教王護国寺境内	南・九条町1番地	8/13	表土より下で東寺北面築地跡を発見。	42
九条三坊七町	南・東九条室町23	11/25	敷地全域が地表下3mまで砂礫層のため覆没。	43
九条三坊四町	南・東九条下殿田町13	12/1	近代の暗渠排水を除き、遺構・遺物なし。	44

平安京右京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
三条一坊十五町	中・西ノ京小倉町1-4,1-5他	12/10	地表F0.8mで平安時代の東西溝1条を検出した。	45
四条三坊八町	右・西院春榮町2-1,3-1	7/14	GL-2.8mで地山の明黄褐色粘質土。遺構・遺物は発見出来ず。	46
五条一坊六町	中・壬生松原町51-9他	11/27	遺構・遺物ともに発見出来ず。	47
六条一坊九町	下・中堂寺庄ノ内町8-1	4/14	GL-0.45mで生け畝状の遺構を検出する。	48
六条西坊西町	右・西院六反田町10	5/9	湿地状堆積物が地表面下2.4mまで続くのを確認する。	49
七条一坊九町	下・七条東八反田町16,17,18	6/27	地表面下0.7mで柱穴3基を検出する。	50
八条四坊五町	南・吉祥院向田西町13他	5/23	GL-1.4m以下、柱川の泥濘堆積。	51
九条一坊十四町	南・唐橋西寺町36	6/12-13	地表面下0.6mで西院築地の基底部と溝溝を発見。本文21頁	52
西寺跡	南・唐橋西寺町28-2	7/16	GL-0.25mで西院の基壇土を確認。本文24頁	53
九条二坊八町	下・柳小路高雄町5-1他	5/26	平安時代後期の井戸・井戸状遺構・土壇を検出。本文25頁	54
九条三坊八町	南・吉祥院西ノ庄測ノ西町9他	9/18	GL-2.5mで柱川の泥濘堆積。	55

洛北地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
岩倉志在地遺跡	左・岩倉志在地309 洛北中学校	4/17	GL-0.48mで近世の東西溝を検出する。	56
小野瓦窯跡	左・上高野小野町10	10/1	溝と粘土採取の可能性のある土壇を各1基検出した。本文30頁	57
植物園北遺跡	北・上賀茂岩戸内町109-1他	6/30	GL-0.9mで平安時代の獨立柱建物・柱穴・土壇などを発見。 発掘調査を指導する。	58
雲林院跡	北・雲野雲林院町79	5/6	視認多く、雲林院に関連する遺構・遺物は認められなかった。	59
聚楽第跡	上・一条通松原西人鏡石町23他	11/13-14	聚楽第の北限を測する溝跡に伴う石垣を検出。設計変更を指導する。本文5頁	60

北白川地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
白河南殿跡	左・聖護院蓮華園町25-6	9/25	GL-2mまで盛土層。2.3m以下は地山の砂礫層。遺構・遺物発見出来ず。	61
法興院跡	中・河原町通奥川上る須物町313他	11/10	地表面下76cm以下は鴨川の泥濘堆積であった。	62

洛東地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
中臣遺跡	山・西野山中臣町44-8,44-11他	8/7	盛土厚く、その下層も泥濘堆積か。	63
中臣遺跡	山・東野森野町1-4	9/3	平安時代に推定される土壇を確認。	64
中臣遺跡	山・勤修寺西栗野町139-1他	4/23	耕土直下で方形田溝の溝を発見する。発掘調査を指導する。	65
中臣遺跡	山・勤修寺西栗野町49	1/4	視認多く、遺構・遺物も認められなかった。	66
中臣遺跡	山・勤修寺東栗野町4他	7/24	GL-0.4m以下、地山の砂礫層。	67
中臣遺跡	山・勤修寺東金ヶ崎町202	7/18	GL-2.2mまで盛土層。	68

伏見・醍醐地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
嘉祥寺跡	伏・深草瓦町13-2他	8/27	GL-1.5m以下、近現代の瓦室関係の埋め土。	69
伏見城跡	伏・山崎町361他	4/30	地山は砂層で顕著な遺構は見えず。	70
伏見城跡	伏・両替町2丁目357他	7/22	1T:時期不明の素掘の井戸や焼土塊。2T:表土下で近世抱衣壺3基を発見する。3T:時期不明井戸1基を発見する。	71
伏見城跡	伏・桃山筑前台町40	6/2	柱穴4基・土壇3基・溝1条を検出したものの、全体に残存状態は悪い。	72
伏見城跡	伏・桃山町本多上野78-4他	10/27	地表下約1mで時期不明の土版・柱穴を検出する。	73
伏見城跡	伏・桃山町伊庭29.30-1	12/18	地表下2.7mで花崗岩の切石1石を発見した。	74

鳥羽地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
鳥羽離宮跡	伏・竹田内畑町148-1,148-3,148-5	8/4	敷地全体が河川の流路であったと考えられる。	75
鳥羽離宮跡	伏・竹田真津水町33-1他	7/4	板敷の耕作面を観察するが、遺構・遺物はない。	76
鳥羽離宮跡	伏・竹田浄菩提院町110	10/29	地表下1mで池底と思われる砂層を検出する。	77
鳥羽離宮跡	伏・竹田田中宮町8-9-10	10/8	湿地帯で遺構・遺物検出できず。	78
鳥羽離宮跡	伏・伏ノ山町32-3,竹田樋ノ上町19-2他	4/9	湿地状堆積と擾乱のみ確認。	79
鳥羽離宮跡	伏・中島御所ノ内町15,73の一部	11/6	湿地状堆積で、遺構・遺物なし。	80
鳥羽離宮跡	伏・中島御所ノ内町36	10/15	地表下1.5m以下で青灰色粘土の堆積。	81
下鳥羽遺跡	伏・下鳥羽岸川町19	5/12	GL-1.4mで弥生から古墳時代にかけての堅穴住居状遺構3基・溝状遺構1基などを発見した。設計変更を指導する。	82

南・桂地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
櫻原庵寺跡	西・櫻原内畑外町22.22-1	5/28	GL-0.25mで方形掘方の柱穴を多数発見する。発掘調査を指導する。	83
上里北ノ町遺跡	西・大原野上羽町39	6/23	GL-1mで地山の砂埋層。遺構・遺物ともに発見出来ず。	84

長岡地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	番号
長岡京跡	南・久堅築山町462	5/16	GL-1.2～1.5m以下は柱川の泥礫堆積。	85
長岡京跡	伏・久我石原町8-45,8-46,8-47,8-48	7/3	明確な遺構・遺物なし。	86
長岡京跡	伏・久我本町12-5	7/30	GL-1.6m以下、粘土層のみ。遺構・遺物発見できず。	87
長岡京跡	伏・久我西出町3-20	11/20	GL-1mで時期不明の東西溝を検出する。	88
長岡京跡	伏・羽東師美川町585他	8/20	GL-1.7mで推定東三坊大路の東西側溝を検出する。本文34頁	89
長岡京跡	伏・羽東師美川町582の一部,583,584	9/8	GL-1.7mで推定東三坊大路東側溝を認めた。本文34頁	90
羽東師志水町遺跡	伏・羽東師志水町111-1他	8/25	GL-0.85m以下、灰色粘土の湿地状堆積。	91

圖 版

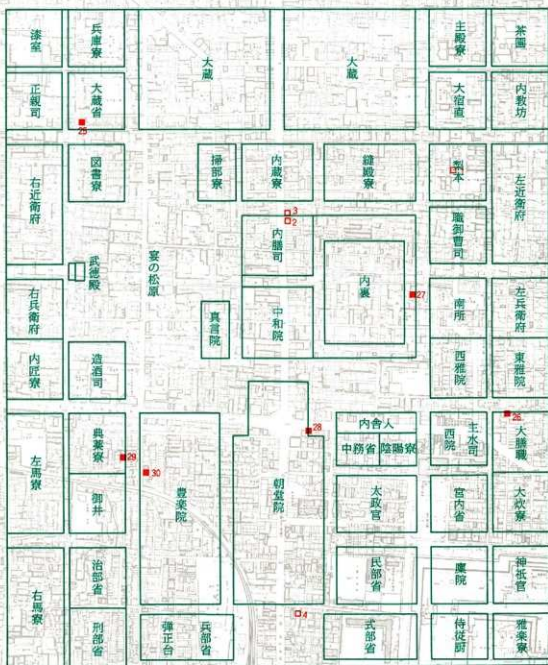
凡 例

平成9年試掘調査地点

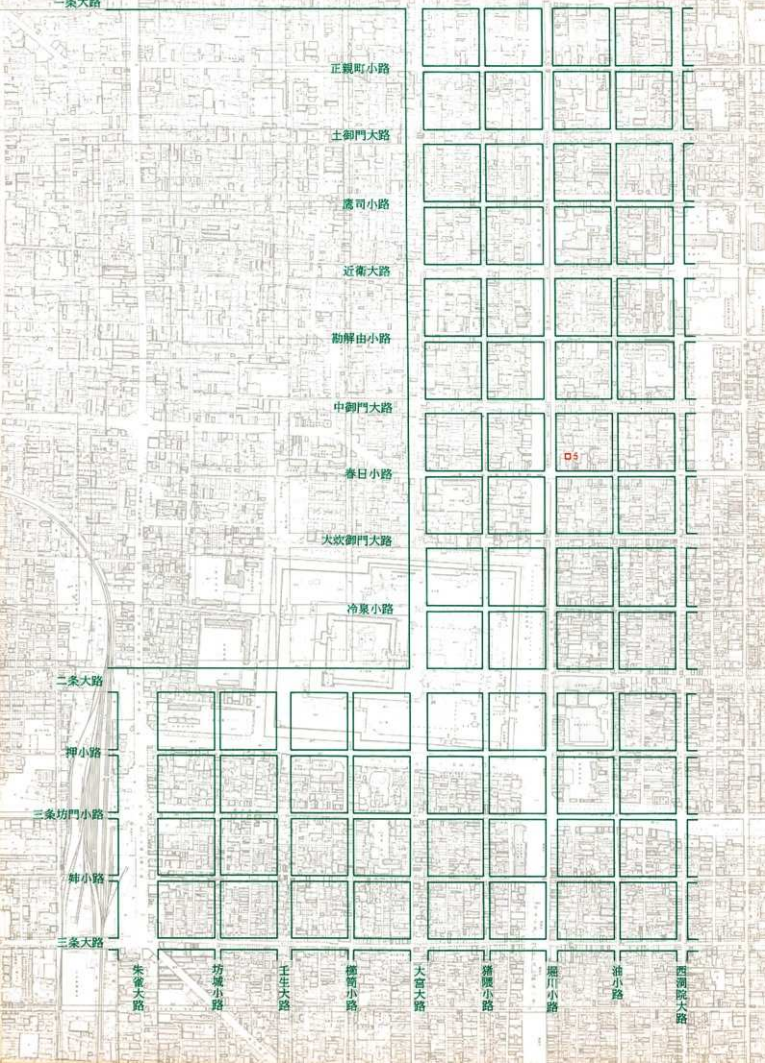
□ 1月～3月

■ 4月～12月

----- 遺跡範囲



一条大路



正親町小路

土御門大路

鷹司小路

近衛大路

勸解由小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

冷泉小路

二条大路

押小路

三條坊門小路

押小路

三条大路

朱雀大路

坊城小路

壬生大路

柳町小路

大宮大路

猪熊小路

堀川小路

滄小路

西洞院大路

平安京左京北辺～三条三・四坊

図版 3

一条大路

正親町小路

土御門大路

鷹司小路

近衛大路

勸解由小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

冷泉小路

二条大路

押小路

三条坊門小路

堀小路

三条大路

西洞院大路

町坊小路

室町小路

烏丸小路

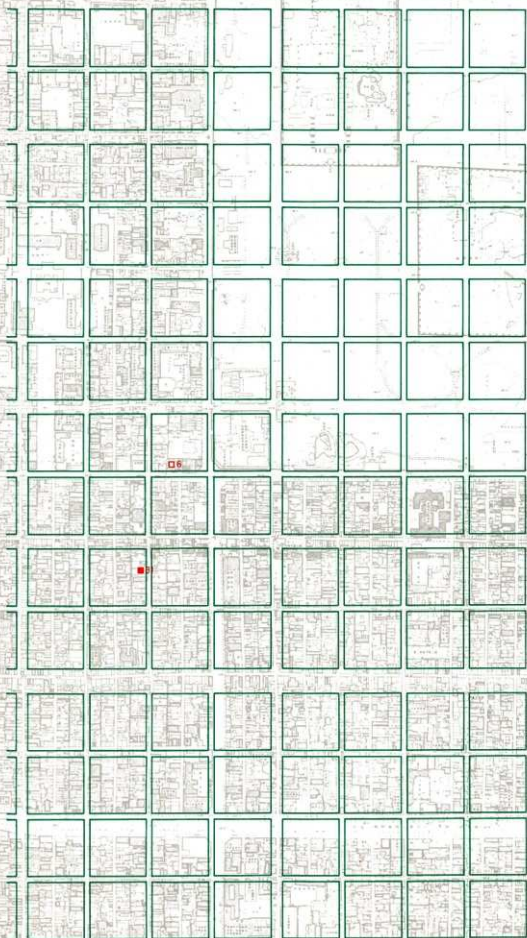
東洞院大路

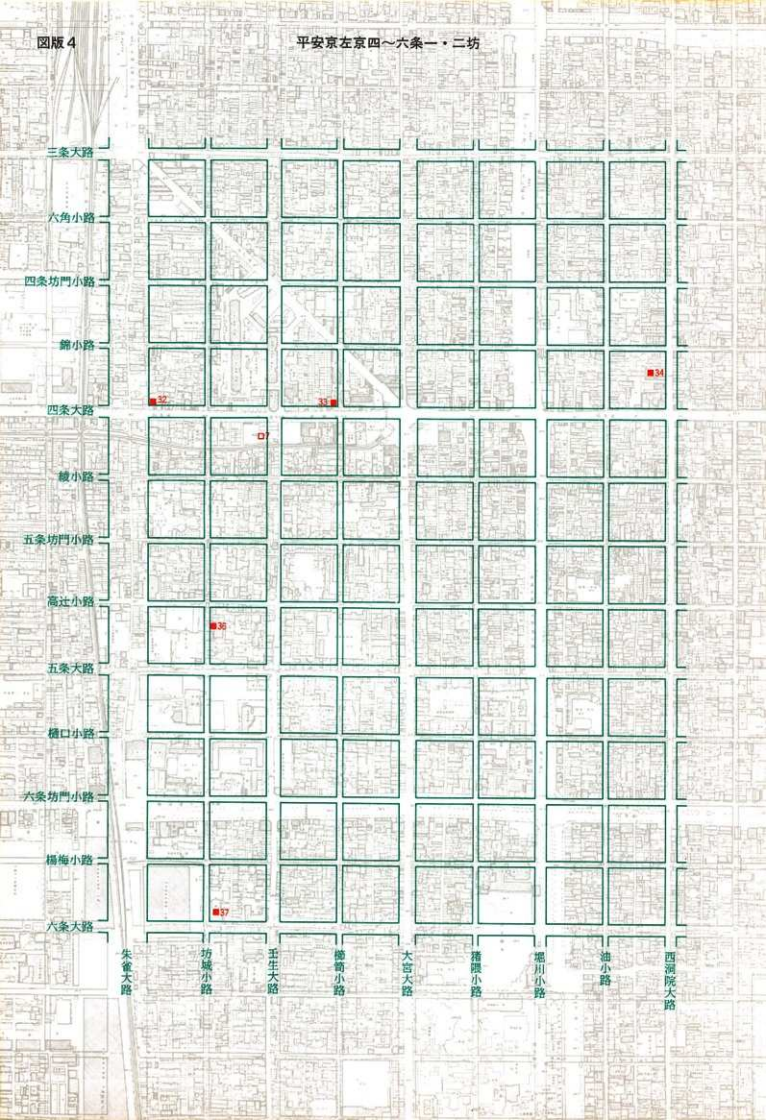
高倉小路

万里小路

富小路

東宮橋大路





三条大路

六角小路

四条坊門小路

錦小路

四条大路

綾小路

五条坊門小路

高辻小路

五条大路

橘口小路

六条坊門小路

橘梅小路

六条大路

朱雀大路

坊城小路

壬生大路

櫛笥小路

大宮大路

播磨小路

堀川小路

油小路

西洞院大路

32

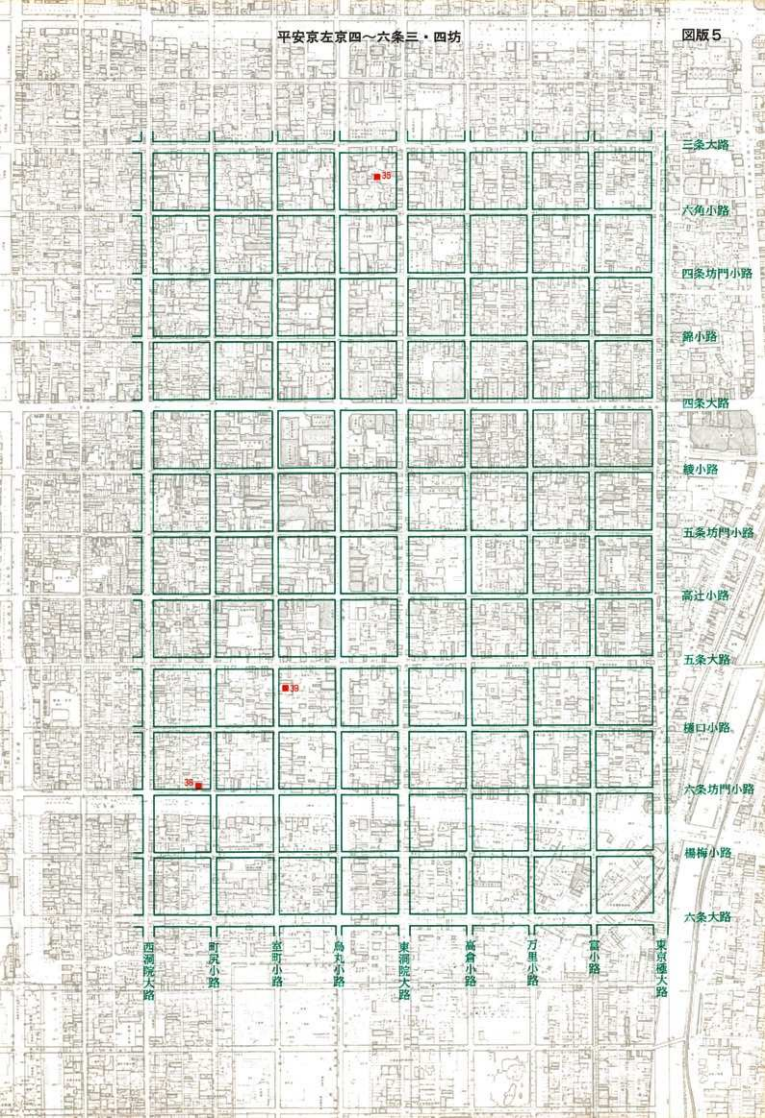
33

34

7

36

37



三條大路

六角小路

四條坊門小路

錦小路

四條大路

綾小路

五條坊門小路

高辻小路

五條大路

橋口小路

六條坊門小路

楊梅小路

六條大路

西洲院大路

町尻小路

室町小路

烏丸小路

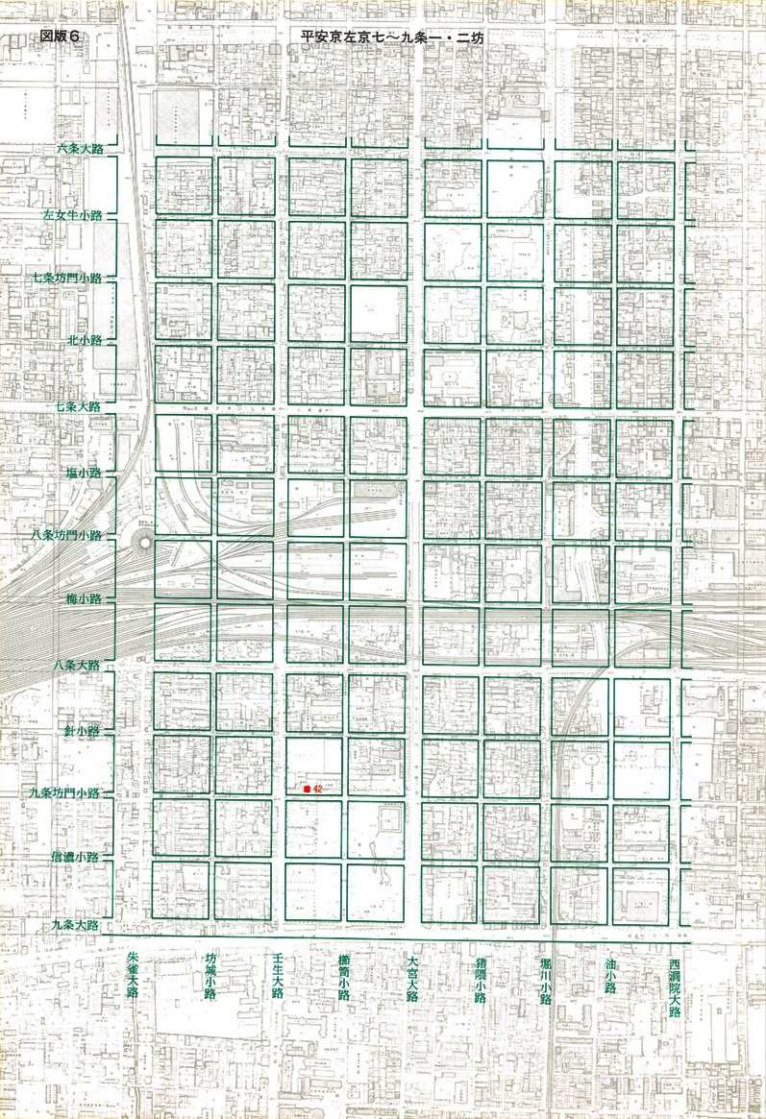
東海院大路

高倉小路

万里小路

富小路

東宮感大路



六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

堀小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

朱雀大路

坊城小路

壬生大路

備前小路

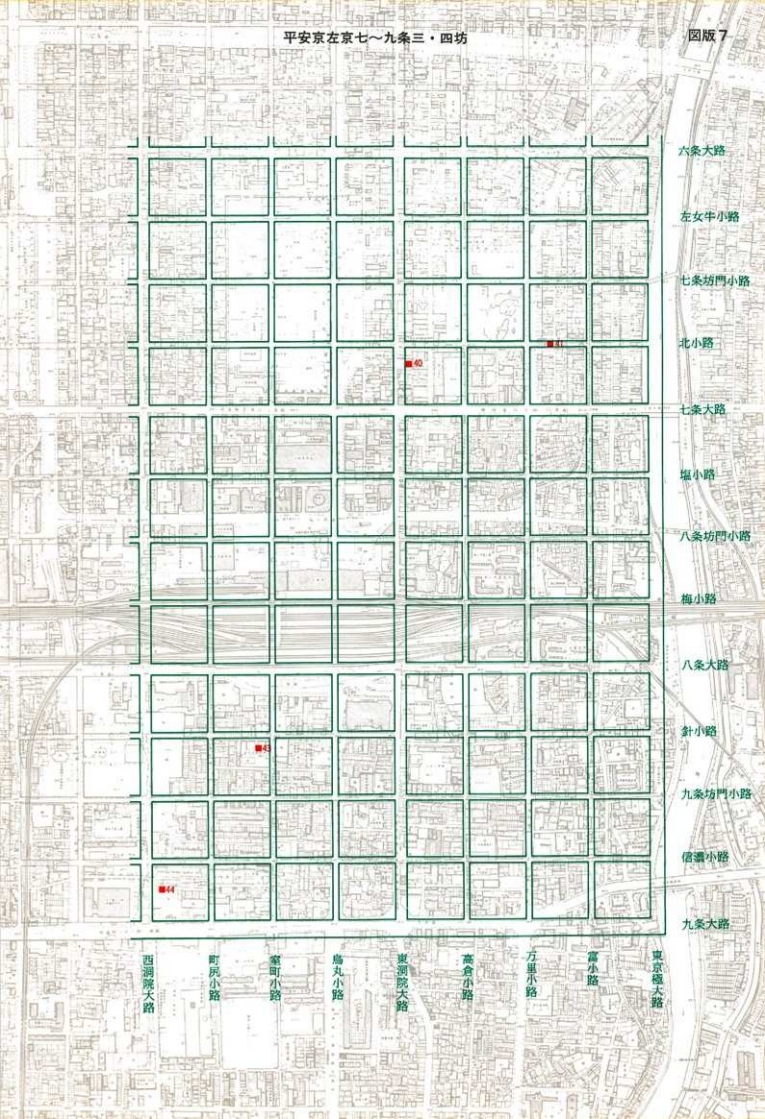
大宮大路

備前小路

堀川小路

油小路

西洞院大路



六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

堀小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

西洞院大路

町尻小路

塞町小路

烏丸小路

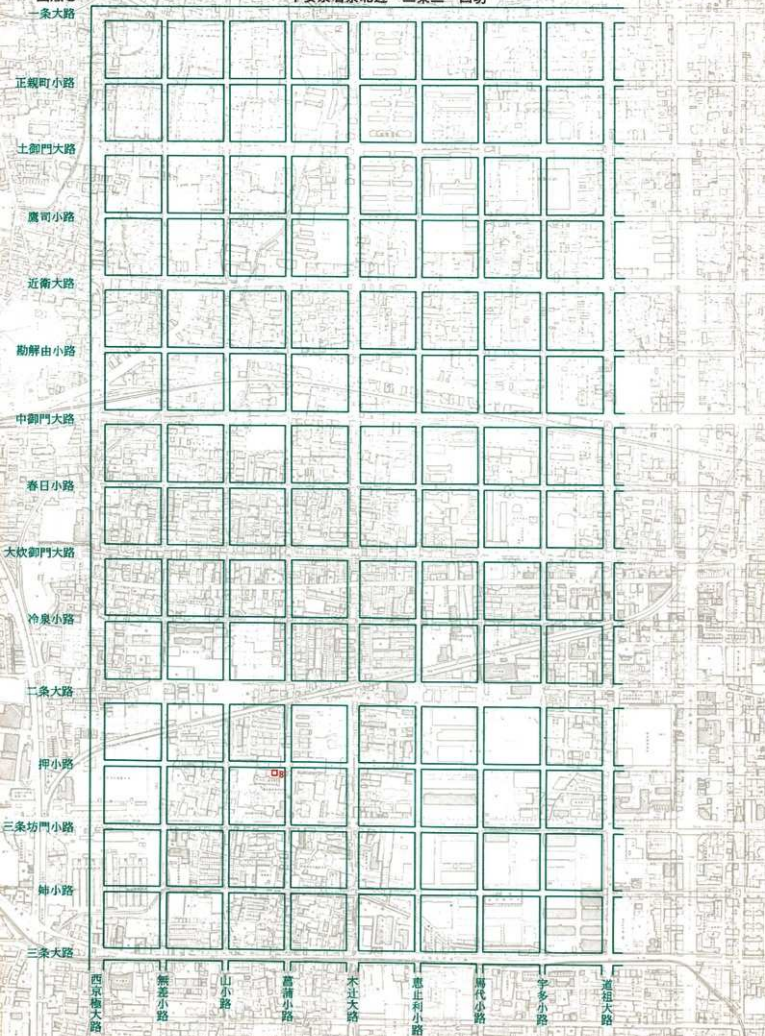
東洞院大路

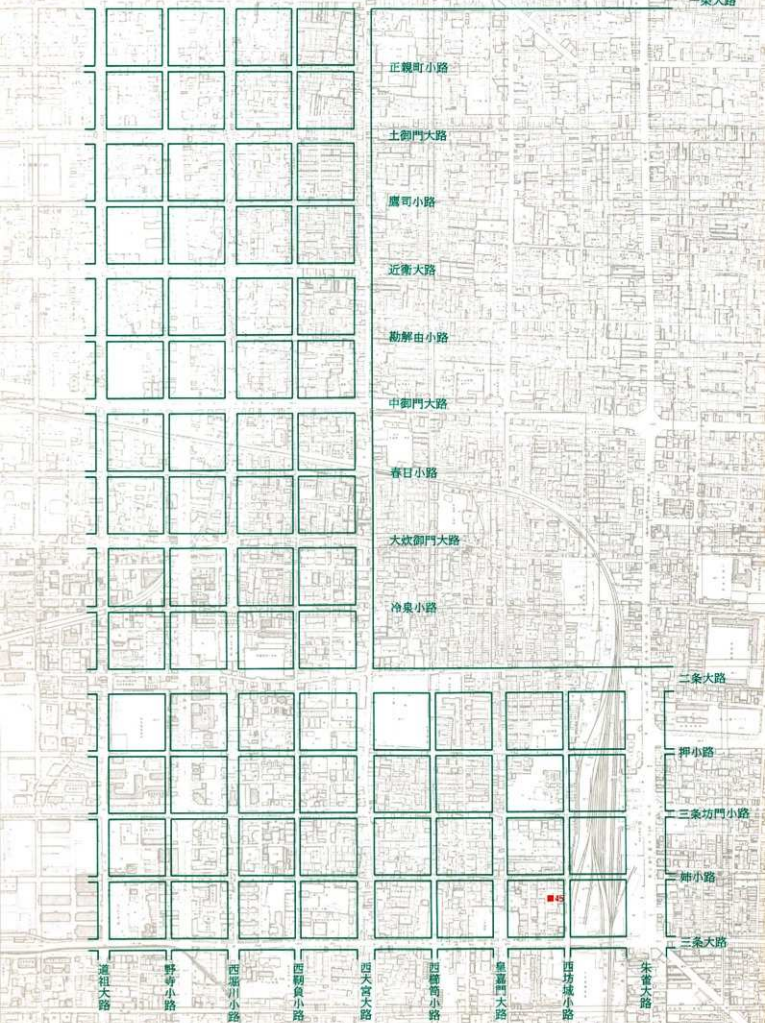
高倉小路

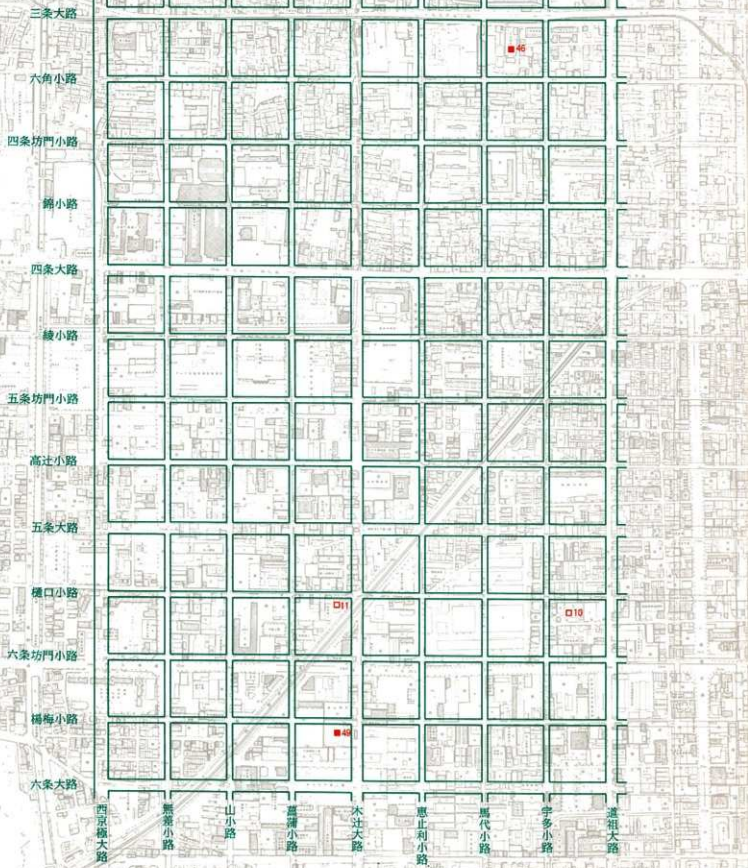
万里小路

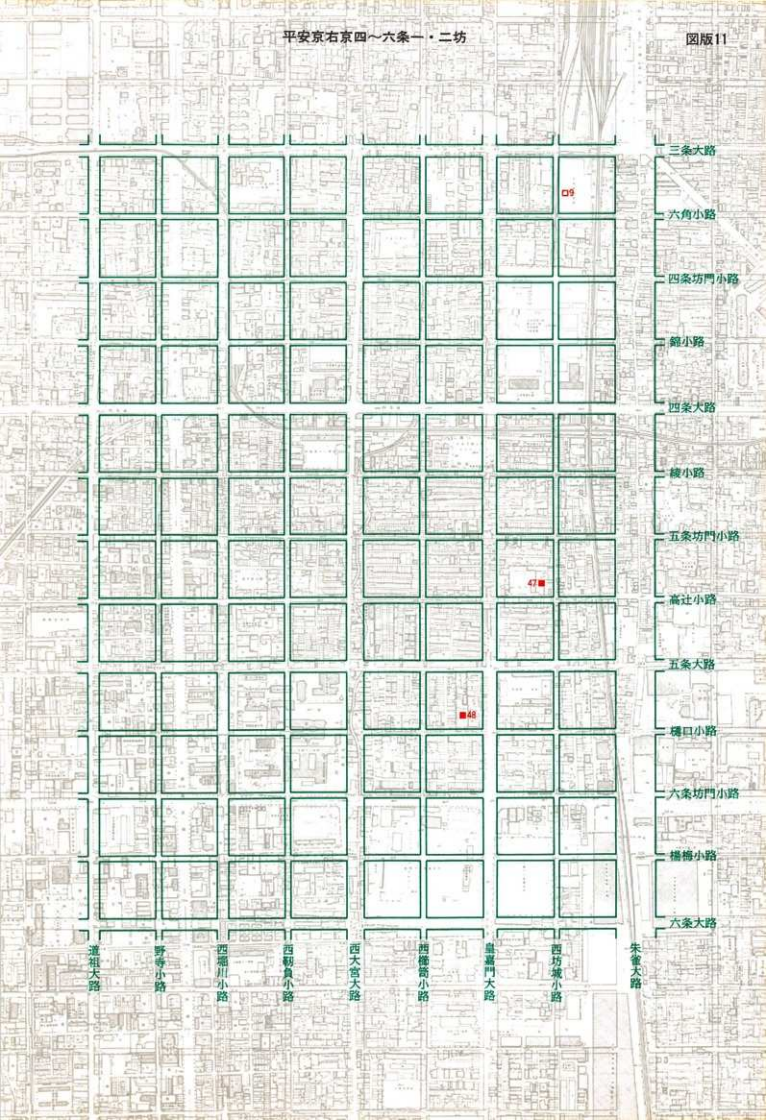
富小路

東京極大路









三条大路

六角小路

四条坊門小路

錦小路

四条大路

綾小路

五条坊門小路

高辻小路

五条大路

樋口小路

六条坊門小路

播磨小路

六条大路

朱雀大路

西坊城小路

皇嘉門大路

西權衛小路

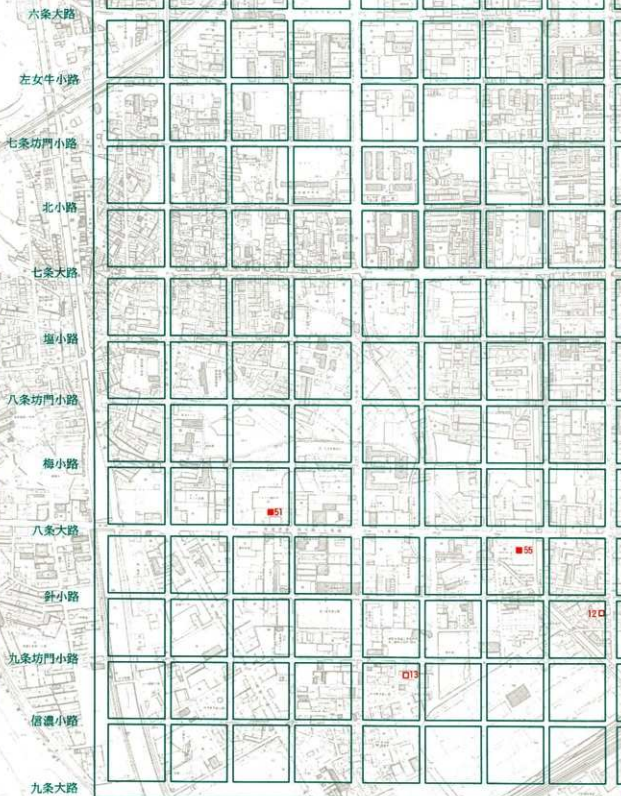
西大宮大路

西朝負小路

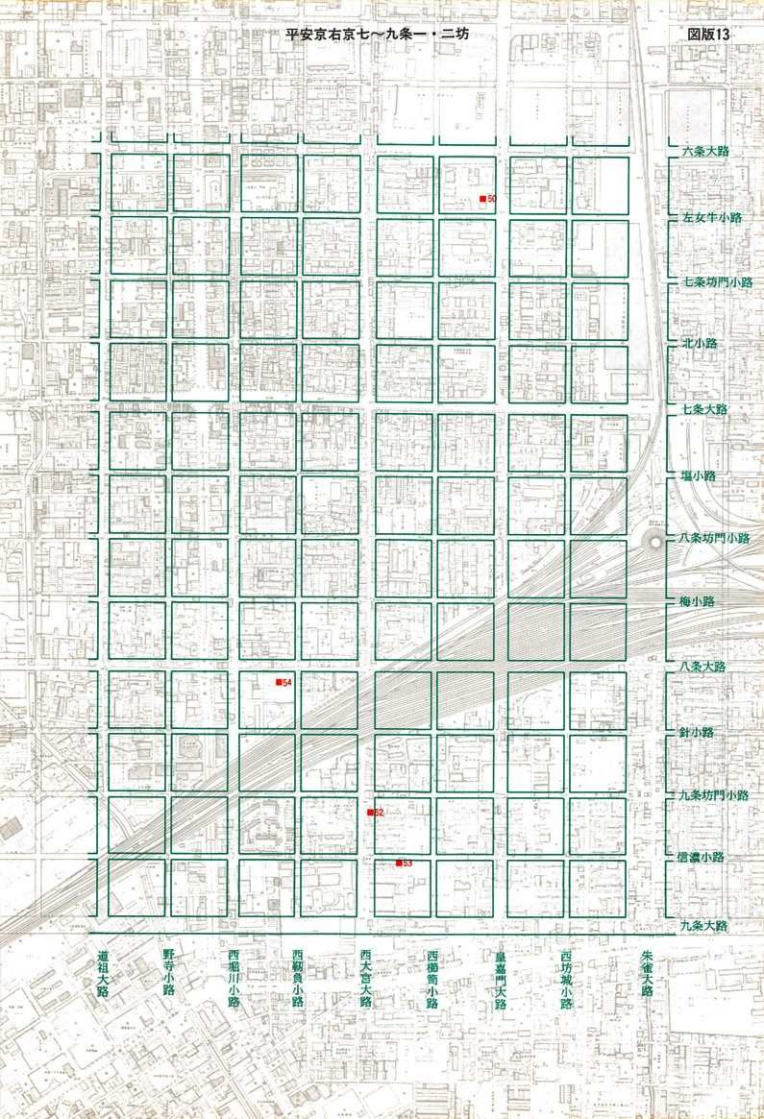
西堀川小路

野寺小路

道祖大路



西京極大路
 無差小路
 山小路
 葛津小路
 木辻大路
 惠止利小路
 馬代小路
 宇多小路
 道祖大路



六条大路

左女半小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

堀小路

八条坊門小路

堀小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

道祖大路

野寺小路

西堀川小路

西朝負小路

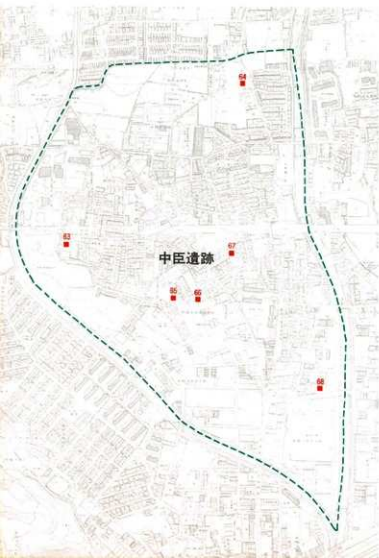
西大宮大路

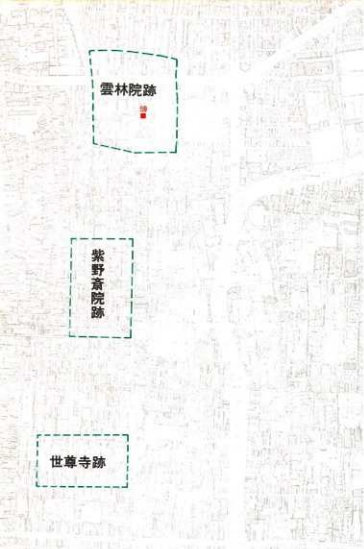
西堀筒小路

皇嘉門大路

西坊城小路

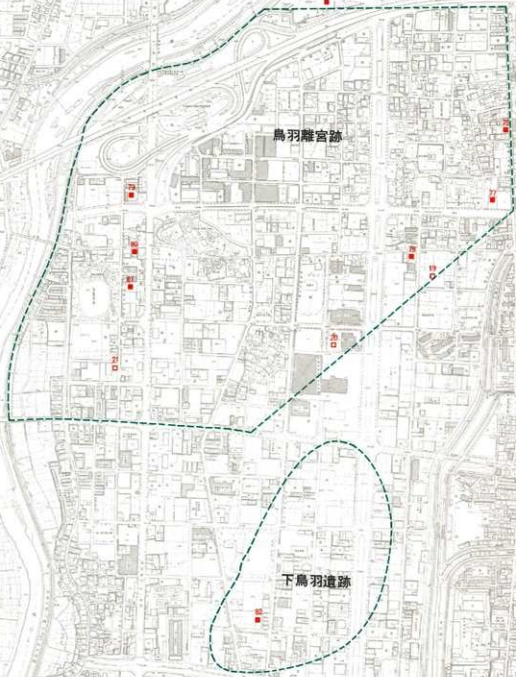
朱雀大路













長岡京跡

羽束師志水町遺跡

京都市内遺跡試掘調査概報

平成9年度

発行日 平成10年3月31日
発行 京都市文化市民局
編集 京都市埋蔵文化財調査センター
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
TEL (075) 441-5261
印刷 株式会社エグズ